

2011

SYLLABUS



浦和大学短期大学部

介護福祉科

目 次

1. 一般教養科目	3
人 間 領 域	5
国 際 文 化 領 域	7
健 康 領 域	10
情 報 文 化 領 域	14
キャリアデザイン領域	20
2. 介護福祉科目	25
人 間 と 社 会 領 域	
(人間の理解・社会の理解・人間と社会に関連する科目)	27
介 護 領 域	41
こころとからだのしくみ領域	63

2011年度授業科目開講一覽表

介護福祉科

●＝必修科目

区分	領域	授 業 科 目	掲載頁	単位数		開講学期				
						1年次		2年次		
				必修	選択	前	後	前	後	
一般 教 養 科 目	人 間	倫理学	5		2		○		○	
		音楽療法	6		2		○		○	
	国 際 文 化	カレッジ・イングリッシュⅠ	7		1	○				
		カレッジ・イングリッシュⅡ	8		1		○		○	
	健 康	英語文化論	9		2		○		○	
		スポーツ実技	10		1	○				
		スポーツ・レクリエーション論	11		2	○				
		レクリエーション活動援助法	12		1	○				
		レクリエーション実技	13		1		○			
		マルチメディア論Ⅰ	14		2	○				
		マルチメディア論Ⅱ	15		2		○		○	
	情 報 文 化	マルチメディア演習基礎Ⅱ	16		1		○			
		ウェブデザイン論	17		2		○		○	
		マルチメディア演習応用A	18		1				○	
		マルチメディア演習応用B	19		1				○	
	キャリアデザイン	エッセンシャルスタディⅠ	20	2		●				
		エッセンシャルスタディⅡ	21	2			●			
		キャリアデザインⅠ	22		1				○	
		キャリアデザインⅡ	23		1				○	
	介 護 福 祉 科	人 間	人間の理解	27	2			●		
人間の理解			28	2		●				
社 会		社会の理解Ⅰ	29	2		●				
		社会の理解Ⅱ	30	2			●			
と 社 会		経営管理論	31		2			○	○	
		生物学	32		2			○	○	
		生活環境学	33		2	○		○		
		現代居住環境論	34		2				○	
		経済学	35		2	○		○		
		社会学	36		2			○	○	
介 護 目		人 間 と 社 会	憲法	37		2	○		○	
			介護の基本Ⅰ	41	4			●		
			介護の基本Ⅱ	42	4			●		
			介護の基本Ⅲ	43	4					●
	コミュニケーション技術		44	2					●	
	生活支援技術Ⅰ		45	1		●				
	生活支援技術Ⅱ		46	1			●			
	生活支援技術Ⅲ		47	2		●				
	生活支援技術Ⅳ		48	2			●			
	生活支援技術Ⅴ		49	2				●		
	生活支援技術Ⅵ		50	2					●	
	介護過程Ⅰ(意義と展開)		51	2				●		
	介護過程Ⅱ(実践的展開)		52	2					●	
	介護過程Ⅲ(居宅)		53	1					●	
	介護過程Ⅳ(施設)	54	1					●		
	介護総合演習Ⅰ	55	2			●				
	介護総合演習Ⅱ	56	2					●		
	介護実習Ⅰ	57	2			●				
	介護実習Ⅱ	58	4					●		
	介護実習Ⅲ	59	1					●		
介護実習Ⅳ	60	3					●			
こ こ ら だ の み	からだのしくみ	63	2			●				
	こころのしくみ	64	2			●				
	こころとからだのしくみⅠ	65	2				●			
	こころとからだのしくみⅡ	66	2					●		
	発達と老化の理解Ⅰ	67	2			●				
	発達と老化の理解Ⅱ	68	2				●			
	認知症の理解Ⅰ	69	2				●			
	認知症の理解Ⅱ	70	2					●		
	障害の理解Ⅰ	71	2				●			
	障害の理解Ⅱ	72	2					●		

一般教養科目

授業のタイトル (科目名) 倫理学		授業の種類 (講義) ・ 演習 ・ 実習)		授業担当者 福島 猛行																															
授業の回数 15回		時間数 (単位数) 30時間 ・ 2単位		配当年次・時期 1, 2年次 ・ 後期																															
				必修・選択 選択																															
<p>【授業の目的・ねらい】</p> <p>倫理学とは、人が正しいと思う判断基準です。その意味で私たちが他者に対する支援をする時、常に考えなければいけないテーマであると言えます。</p> <p>この授業では、対人支援に必要と思われるいくつかの倫理的命題を紹介し、理解を深めると共に、対人支援の場で実践していく上での留意点について、グループでのディスカッションを踏まえて理解を深めたいと思います。</p> <p>【授業終了時の達成課題 (到達目標)】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 対人支援者にとって必要な倫理と、その背景に対する理解を深める。 2. 人の尊厳を支える支援とは？についての倫理的背景を知る。 																																			
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】</p> <p>コマ数</p> <table border="0"> <tr><td>1. 倫理学とは？(1)</td><td>～倫理と道徳～</td></tr> <tr><td>2. 倫理学とは？(2)</td><td>～彼方の倫理とは？～</td></tr> <tr><td>3. 個人の判断基準</td><td>～『徳』についての考察～</td></tr> <tr><td>4. 権利と倫理(1)</td><td>～『自由』と『人権』について～</td></tr> <tr><td>5. 権利と倫理(2)</td><td>～人はどこまで『自由』か？～</td></tr> <tr><td>6. 命を考える(1)</td><td>～人は『死』をどう理解してきたか？～</td></tr> <tr><td>7. 命を考える(2)</td><td>～2つの生命倫理～</td></tr> <tr><td>8. 命を考える(3)</td><td>～彼方は『命』をどう考えるか？～</td></tr> <tr><td>9. 命を考える(4)</td><td>～『倫理公準』考える上での判断基準～</td></tr> <tr><td>10. 支援する上での倫理(1)</td><td>～判断をどこまで他者に委ねられるか？～</td></tr> <tr><td>11. 支援する上での倫理(2)</td><td>～『癒し』の倫理～</td></tr> <tr><td>12. 職能倫理とは</td><td>～専門職の倫理とその意味～</td></tr> <tr><td>13. 対人支援者の職能倫理(1)</td><td>～対人支援者としてやるべき事・やってはいけない事～</td></tr> <tr><td>14. 対人支援者の職能倫理(2)</td><td>～演習～</td></tr> <tr><td>15. 対人支援者の職能倫理(3)</td><td>～発表～</td></tr> </table> <p>試験</p>						1. 倫理学とは？(1)	～倫理と道徳～	2. 倫理学とは？(2)	～彼方の倫理とは？～	3. 個人の判断基準	～『徳』についての考察～	4. 権利と倫理(1)	～『自由』と『人権』について～	5. 権利と倫理(2)	～人はどこまで『自由』か？～	6. 命を考える(1)	～人は『死』をどう理解してきたか？～	7. 命を考える(2)	～2つの生命倫理～	8. 命を考える(3)	～彼方は『命』をどう考えるか？～	9. 命を考える(4)	～『倫理公準』考える上での判断基準～	10. 支援する上での倫理(1)	～判断をどこまで他者に委ねられるか？～	11. 支援する上での倫理(2)	～『癒し』の倫理～	12. 職能倫理とは	～専門職の倫理とその意味～	13. 対人支援者の職能倫理(1)	～対人支援者としてやるべき事・やってはいけない事～	14. 対人支援者の職能倫理(2)	～演習～	15. 対人支援者の職能倫理(3)	～発表～
1. 倫理学とは？(1)	～倫理と道徳～																																		
2. 倫理学とは？(2)	～彼方の倫理とは？～																																		
3. 個人の判断基準	～『徳』についての考察～																																		
4. 権利と倫理(1)	～『自由』と『人権』について～																																		
5. 権利と倫理(2)	～人はどこまで『自由』か？～																																		
6. 命を考える(1)	～人は『死』をどう理解してきたか？～																																		
7. 命を考える(2)	～2つの生命倫理～																																		
8. 命を考える(3)	～彼方は『命』をどう考えるか？～																																		
9. 命を考える(4)	～『倫理公準』考える上での判断基準～																																		
10. 支援する上での倫理(1)	～判断をどこまで他者に委ねられるか？～																																		
11. 支援する上での倫理(2)	～『癒し』の倫理～																																		
12. 職能倫理とは	～専門職の倫理とその意味～																																		
13. 対人支援者の職能倫理(1)	～対人支援者としてやるべき事・やってはいけない事～																																		
14. 対人支援者の職能倫理(2)	～演習～																																		
15. 対人支援者の職能倫理(3)	～発表～																																		
<p>【準備学習】</p> <p>個々の学生が意見を述べる場を多く提供したい。そのため、授業で学習した事柄について自らに置き換えて、十分に復習することが望ましい。</p>																																			
<p>【使用テキスト・参考文献】</p> <p>テキスト：授業時にプリントを配布します</p> <p>参考文献：介護福祉のための倫理学 (弘文堂) 介護の基本Ⅰ・Ⅱ (中央法規出版)</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 ミニレポート (授業時間に実施) : 40% 2 出席 : 30% 3 試験 : 30% 																																

授業のタイトル（科目名） 音楽療法		授業の種類 （ 講義 ・演習・実習）		授業担当者 新田 久子	
授業の回数 15回		時間数（単位数） 30時間・2単位		配当年次・時期 1, 2年次・後期	
				必修・選択 選択	
<p>【授業の目標・ねらい】 人間と音楽（音）は生活の中で深くかかわっている。音楽によって心を癒され、勇気付けられた体験を多くの人が持っていると思う。このように人が音楽を創り育み、音楽は人の健康に役立ちながら互いに発達してきた。今日、雑多な情報が氾濫する中で、豊かな人間関係の構築は生活の質を高めるための重要な課題である。音楽が人々の心と体にどのように働きかけるのか？音楽の持つ機能を知り活用するための基礎的な理論と実践を学び、コミュニケーションを無理なくとる方法を知り、さまざまな対応法を学生自身が創り出す力をつける。個人を尊重し認め合い他者と共にいる心地よさ、言語的、非言語的コミュニケーションをとる楽しさを体験し、それらの音楽活動を私生活や職場で良い人間関係づくりに応用活用できるよう柔軟性、積極性を育むことを授業の目的としている。</p> <p>【授業全体の内容の概要】 音楽が生活に及ぼす有害性と有用性を知り、音楽の働きを理解する。他者の心身の状況にあった音楽の活用法を学生自身が五感を使ってグループ体験する。グループ活動を楽しみつつ学生一人一人の特技や長所を生かす、自己表現を促す、協調性や意欲を高めあうなど、私生活や職場で良い人間関係を築く過程を体験する。</p> <p>【授業修了時の達成課題（到達目標）】 高齢者と非言語的コミュニケーションをとる音楽活動を少なくとも3種類身につけていること。 高齢者とコミュニケーションをとるための媒体として音楽活動を含めたプログラム作成ができること。</p>					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数 授業形式（講義、演習、グループワーク、小クイズ）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーションと自己紹介、他者紹介 2. 音楽（音）の生活への影響・体験談 3. 音楽（音）の持つ有害性と有用性について 4. 音楽療法と音楽教育、音楽レクの違いは何か 5. 音楽がなぜ人間の心と体に影響するか？ 6. 音楽がなぜ人の感情を左右するか？ 7. 音楽の特性と音楽療法の原理 8. 非言語的・言語的コミュニケーションとしての音楽活用法を考える 9. 目的に沿った音楽活動 10. プログラム案作成 11. プログラム案作成：グループ演習 12. グループ発表：実習リハーサル 13. 実習事前指導 14. 施設にて現場実習 15. 実習事後指導 実習リポート提出					
<p>【準備学習】 身近な高齢者と対話する。（例．好みの食べ物・曲などを聞く。）</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】 『ここに届く高齢者の音楽療法』 ドレミ楽譜出版、師井和子著</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】 総合判定： 1. ミニテスト：40% 2. レポートおよび提出物：20% 3. 出席および授業態度：40%</p>		

授業のタイトル (科目名) カレッジイングリッシュ I		授業の種類 (講義・ 演習 ・実習)		授業担当者 高松 節子	
授業の回数 15回	時間数 (単位数) 30時間・1単位	配当年次・時期 1年次・前期		必修・選択 選択	
<p>【授業の目的・ねらい】 国際化社会に対応するための英語力の強化が目的であり、その上で、福祉を専攻している学生に適した英語の運用能力を高めることがねらいです。</p> <p>【授業全体の内容の概要】 Viva! San Francisco (MacMillan Language House) のビデオと音声テープ、テキストを併用して平易な英語のリスニングの練習を行ないます。自然なスピードの英語を理解し、また基本的な日常会話が行なえるよう学習します。各 CHAPTER の Face The Camera では、現地で実際つかわれている生の英語がどのようなものか、聞いて楽しんでもらえるとよいと思います。主人公 Keiko Yamamoto のアメリカ (サンフランシスコ) 体験が 1 CHAPTER 完結のかたちで、全 CHAPTER にわたり継続的に進められます。状況や場面にふさわしい英語表現を習得し、リスニング並びにスピーキングの能力を養います。NM 教室のペアレッスン機能を用いて学生同士がテキストにある英語会話を行なったり、ビデオに向かってパートを演じたりします。またいくつかの表現を選んで同じくペアレッスンで会話の練習をします。</p> <p>【授業終了時の達成課題 (到達目標)】 国際社会で通用する総合的英語能力の強化を目指します。</p>					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Course Introduction 2. Where Do I Get the Bus? 3. Do You Have a Reservation, Ma'am? 4. Could You Repeat That? 5. I'll Take the Wrangler Convertible 6. Would You Like Soup or Salad? 7. Where's the Fitting Room? 8. Would You Mind Taking My Picture? 9. Good to See You! 10. I Enjoyed My Stay 11. Aisle Seat, Please : 小テスト 12. You Are One of the Family Now 13. I Want to Help! 14. So, What's Your Major? 15. I'll Try to Do My Best <p>試験</p>					
<p>【準備学習】 テキストを開いて知らない単語があれば必ず辞書で調べて予習すること。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】 Viva! San Francisco—Video Approach to Survival English : MacMillan Language House (2010)</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】 期末試験、平常点を総合したものが評価の対象となります。 試験：60% 平常点：40%</p>		

授業のタイトル (科目名) カレッジイングリッシュⅡ		授業の種類 (講義・ 演習 ・実習)		授業担当者 高松 節子	
授業の回数 15回		時間数 (単位数) 30時間・1単位		配当年次・時期 1, 2年次・後期	
				必修・選択 選択	
<p>【授業の目的・ねらい】 カレッジイングリッシュの次のランクにくる位置にあります。この授業はアメリカの学生生活で使われている言葉に慣れるというのがねらいです。それを Language Focus としてその課の目標に設定し、疑似体験をしながら実際に使われている英語を聞き取ったり、自分の言葉で発話したりして、「少しは分かった」「なんとか英語が話せた」と実感してもらえたらいいと思います。</p> <p>【授業全体の内容の概要】 ビデオを見る前に Language Focus でその課の目標である、特定の表現が選択されます。具体的な関心を持ちながら画面での会話を楽しみます。繰り返し全体の場面の展開を見ることで、英語でのコミュニケーションの要領が身につくでしょう。映像で見た会話の内容を要約して文章にして、内容をもう一度確認します。会話の表現と書き言葉の違いにも関心を持って学習すれば、英文を書く場合の参考にもなるでしょう。</p> <p>【授業修了時の達成課題 (到達目標)】 学生が授業開始時にたてた目標に相応しい能力を得ることです。</p>					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Course Introduction 2. I'm Looking for Old Main Hall 3. I Have a 10:30 Appointment 4. Are you Looking for a Place to Stay? 5. I'll Be Glad to Room with You Guys 6. The Experience Is Really Important 7. I'll Get Right on It 8. Just Tell Me 9. Review: 小テスト 10. Don't worry About It 11. Come Here and Give Me a Hug 12. I Love You Mom 13. I Deserve a Better Grade 14. Any Other Questions? 15. Review <p>試験</p>					
<p>【準備学習】 テキストを開いて知らない単語があれば必ず辞書で調べて予習すること。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】 <i>Campus Encounters</i>: MacMillan Language House (2010)</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】 期末試験、平常点を総合したものが評価の対象となります。 期末試験：60% 平常点：40%</p>		

授業のタイトル (科目名) 英語文化論		授業の種類 (講義)・演習・実習		授業担当者 高松 節子	
授業の回数 15回		時間数 (単位数) 30時間・2単位		配当年次・時期 1, 2年次・後期	
				必修・選択 選択	
<p>【授業の目的・ねらい】 「何を言わないか」という視点から、「言語の文化」および「言語と文化」の問題を考究していきたいと思えます。主に英語の表現を研究していきます。英語のことは遊びを中心にした授業が広く深い英語の文化の一端に受講生の目を開くよすがともなれば幸いです。</p> <p>【授業全体の内容の概要】 文化としてのことば、つまりことばそのものが文化であるということ。ことば以外の文化とことばのかわり。すなわち、単語一つをとってもそのことばが文化を背負っているということ。そういうことを考えていきたい。特に英語の笑いの表現について学んでいきます。長い間、どちらかといえば「物言わぬ文化」を培ってきた日本人は、気のきいた会話が不得手のようです。ことばで勝負することに慣れている英語文化に学ぶところもまた、少なくなしとしないでしょう。言葉を、操作しやすい記号として見るのが、ヒューモアのまた本講義の第一課です。</p>					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「何を言わないか」 “Your first dog, madam?” 2. Two-liners 「脱線問答」 3. Riddles, Metanalysis, 異分析 4. The You-Tell-‘Em 「言っておやりよ」 5. The Soup Fly “All right, I’ll bring you a fork.” 6. 「ノック遊び」 Knock, knock. 7. Boners, Howlers 「珍答案」 8. Wellerism, 地口 (Pun) : 小テスト 9. How’s Business? 「景気はどうかね」 10. The Last Words 「最後のことば」 11. Tom Swifties 「トム・スィフティーズ」 12. Croakers 「クロウカーズ」 13. Marshallism 「マーシャリズム」 14. Irish bull 「アイリッシュブル」 15. English Superstitions <p>試験</p>					
<p>【準備学習】 テキストを開いて自分の興味のある逸話を予習すること。知らない単語があれば必ず辞書で調べ、英文和訳をノートする。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】 200Anecdotes : 開文社出版 (2007) 他に教材プリントを配布します。</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】 平常点 : 40% 試験 : 60%</p>		

授業のタイトル (科目名) スポーツ実技		授業の種類 (講義・ 演習 ・実習)		授業担当者 槇野 陽介	
授業の回数 15回	時間数 (単位数) 30時間・1単位	配当年次・時期 1年次・前期		必修・選択 選択	
<p>[授業の目的・ねらい] スポーツ実技Aは、健康教育に身体づくりの実践という立場で授業を展開し、豊かなライフスタイルを形成できる能力を身につけることを目的とする。 [※この講義は、レクリエーション・インストラクター、障害者スポーツ指導者初級指導員の資格取得の講座でもある]</p> <p>[授業全体の内容の概要] 運動種目には、個人競技、集団競技を用い、これら競技の持つ様々な特性を重視しながら指導を展開する。</p> <p>[授業修了時の達成課題 (到達目標)] 福祉従業者として実用的な観点から、障害者や高齢者の親しんでいるスポーツの多くを学ばせ、スポーツ活動から得られる喜びや楽しさを体得させる。</p>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 実技種目を行うに当たっての心構えと健康調査 2. 体力測定の実施 (筋力、敏捷性、平衡性) 3. 体力測定の実施 (柔軟性、全身持久性) と評価 4. ストレッチの指導 5. 運動器具を用いないで行う健康・体力づくり運動の実際(1) 6. 運動器具を用いないで行う健康・体力づくり運動の実際(2) 7. 運動器具を用いて行う健康・体力づくりの実際 8. 健康・体力を保持増進させるためのウォーキング、ジョギングの実際 9. 障害者スポーツ種目の体験と実際(1) 10. 障害者スポーツ種目の体験と実際(2) 11. 高齢者スポーツ種目の体験と実際(1) 12. 高齢者スポーツ種目の体験と実際(2) 13. 団体競技の体験と実際(1) 14. 団体競技の体験と実際(2) 15. 団体競技の体験と実際(3) <p>総合的指導と評価</p>					
<p>[準備学習] この授業は、青年期の仕上げとしての身体づくり教育の一環として行われる。その為、授業に望むに当たっては、夜更かしなどは行わず、また、スポーツがスムーズに実施できるように体調管理には充分に気を付けて授業に望むこと。</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献] (テキスト) 授業に合わせ資料を配布</p> <p>(参考文献) 「ニュースポーツ百科」大修館書店</p>			<p>[単位認定の方法及び基準] (試験やレポートの評価基準など) 出席状況、授業に対する態度、レポートなどにより評価</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 出席：20% 2. 試験50% 3. レポート・アンケート調査：20% 4. 授業態度：10% 		

授業のタイトル(科目名) スポーツ・レクリエーション論		授業の種類 (講義)・演習・実習		授業担当者 植屋 悦男・山形 高司	
授業の回数 15回		時間数(単位数) 30時間・2単位		配当年次・時期 1年次・前期	
				必修・選択 選択	
<p>【授業の目的・ねらい】 スポーツ・レクリエーションの基礎的理解を深めた上で、社会福祉の場におけるスポーツ・レクリエーション指導のあり方、展開法を学ばせる。 [※この講義は、レクリエーション・インストラクター、障害者スポーツ指導者初級指導員の資格取得の講座科目を兼ねている]</p> <p>【授業全体の内容の概要】 スポーツ・レクリエーションは多くの人が楽しさを味わい、社会参加のための健康・体力づくりを求めている。スポーツ・レクリエーションの展開法を習得させる。</p> <p>【授業修了時の達成課題(到達目標)】 スポーツ・レクリエーションのもつ健康・体力、明朗、闊達、ゆとり、やる気、仲間づくりなどの効用を理解させる。</p>					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. スポーツ・レクリエーションについて 2. スポーツ・レクリエーションの展望 3. スポーツ・レクリエーションに期待するもの 4. スポーツ・レクリエーションの日常活動 5. スポーツ・レクリエーションの指導者育成 6. 障害者とスポーツ・レクリエーション 7. 高齢者とスポーツ・レクリエーション 8. スポーツ・レクリエーションと安全 9. ニュースポーツ技法① 10. ニュースポーツ技法② 11. ニュースポーツ技法③ 12. ニュースポーツ技法④ 13. ニュースポーツ技法⑤ 14. 障害者の行っているスポーツ・レクリエーション 15. みんなが楽しめるスポーツの工夫 <p>講義の到達目標に対する総括</p>					
<p>【準備学習】 この授業では、社会福祉の場における障害者や高齢者に対し、スポーツ・レクリエーションの指導法や展開法を学ばせる。その為、障害者や高齢者のスポーツにはどのような種目があるのか、またルールはどのようなになっているのかを事前に調べておくこと。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】 (テキスト) 随時資料を配布 (参考書) 「レクリエーション入門」 日本レクリエーション協会編</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】 (試験やレポートの評価基準など) 出席、レポート、筆記試験により総合評価 1. 出席：20% 2. 試験：60% 3. レポート・アンケート調査：10% 4. 授業態度：10%</p>		

授業のタイトル(科目名) レクリエーション活動援助法		授業の種類 (講義・ 演習 ・実習)		授業担当者 植屋 悦男	
授業の回数 15回	時間数(単位数) 30時間・1単位	配当年次・時期 1年次・前期		必修・選択 選択	
<p>[授業の目標・ねらい] レクリエーション活動援助法の社会的意義について、基礎的理解を踏まえた上で社会福祉の場におけるレクリエーション援助のあり方、援助技術について学ばせる。 [※この講義は(財)日本レクリエーション協会公認資格、レクリエーション・インストラクターの取得講座の主要科目も兼ねている]</p> <p>[授業全体の内容の概要] 福祉領域でのレクリエーション活動援助法の意義、レクリエーション活動援助計画の作成法、レクリエーション活動援助法の実際とその評価について授業を展開する。特に障害者施設、高齢者施設でのレクリエーション活動援助法については事例を挙げて詳しく指導する。</p> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)] 社会福祉の場におけるレクリエーション活動援助法の意義・あり方を理解させ、レクリエーション活動援助の計画・作成法を学ばせ、レクリエーション活動援助法の実践的援助能力を修得させる。</p>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 現代社会におけるレクリエーション活動援助法の意義 2. レクリエーション活動援助法の内容 3. 遊びの意義とレクリエーション活動援助法(1) 4. 遊びの意義とレクリエーション活動援助法(2) 5. 心身の健康とレクリエーション活動援助法 6. 社会福祉とレクリエーション活動援助法 7. レクリエーション活動に基づく援助事例の紹介? 8. レクリエーション活動に基づく援助事例の紹介? 9. 障害児(者)向けのレクリエーション活動と援助法? 10. 障害児(者)向けのレクリエーション活動と援助法? 11. 高齢者向けのレクリエーション活動と援助法? 12. 高齢者向けのレクリエーション活動と援助法? 13. レクリエーション活動援助の計画と作成法 14. アセスメントに基づくレクリエーション活動援助の模擬体験? 15. アセスメントに基づくレクリエーション活動援助の模擬体験? <p>レクリエーション活動援助法のまとめ</p>					
<p>[準備学習] この科目は一般高齢者から、介護を必要とする高齢者へのレクリエーションを学ぶ授業である。そのため、高齢者の特性を調べた上で授業を受けること。</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献] (テキスト) 授業に合わせ資料を配布 (参考書) 『やさしいレクリエーション実践』 日本レクリエーション協会編 必要に応じ、別途指示</p>			<p>[単位認定の方法及び基準] 出席、授業に取り組む態度、作品の提出物・レポートなどにより総合的に評価</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 出席：20% 2. 試験：60% 3. レポート・アンケート調査：10% 4. 授業態度：10% 		

授業のタイトル (科目名) レクリエーション実技		授業の種類 (講義・ 演習 ・実習)		授業担当者	
授業の回数 15回	時間数 (単位数) 30時間・1単位	配当年次・時期 1年次・後期		必修・選択 選択	
<p>【授業の目的・ねらい】 レクリエーション援助を実践する際の基本的な考え方に従い、援助に必要な対人援助の技術やレクリエーション固有の援助技術などを学ばせる。 [※この講義は(財)日本レクリエーション協会公認資格、レクリエーション・インストラクターの取得講座も兼ねている]</p> <p>【授業全体の内容の概要】 レクリエーション活動の援助計画に基づき、障害者、高齢者のスポーツ・レクリエーションの実践運動を積極的に展開させる。</p> <p>【授業修了時の達成課題 (到達目標)】 レクリエーション活動の実践援助能力を習得させる。</p>					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. コミュニケーション・ワーク(1)：ホスピタリティ・トレーニング 2. 1) 共感のアクション、話す要領、表情トレーニング 3. 2) ノンバーバルコミュニケーショントレーニング 4. 3) 自己表現トレーニング、交流分析など 5. コミュニケーション・ワーク(2)：アイスブレイキングの技法 6. 1) アイスブレイキングの素材の体験 7. 2) 初めて合った人たちが知り合っていくプロセスを体験 8. 3) アイスブレイキングプログラムを体験し、進め方や構成を学ぶ 9. 福祉レクを意識した活動 (1～4の概要) 10. 1) 障害者を対象にしたレク活動・種目を学ぶ 11. 2) 高齢者を対象にしたレク活動・種目を学ぶ 12. 3) 高齢者を対象にしたレク活動・種目を学ぶ 13. 4) 切り絵(1) 14. 5) 切り絵(2) 15. 芸術・文化・学習活動に関係した種目の体験 まとめ、総合評価					
<p>【準備学習】 この科目はレクリエーション活動援助法で学んだことを、応用して学習する授業である。様々なレクリエーション実技(種目)の情報を集め、整理しておくこと。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】 (テキスト) 授業に合わせ資料を配布</p> <p>(参考書) 「レクリエーション・ワーク」廣池利邦、他編著</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】 (試験やレポートの評価基準など)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 出席：20% 2. 試験：40% 3. レポート・アンケート調査：10% 4. 授業態度：10% 5. 実技・技能：20% 		

授業のタイトル (科目名) マルチメディア論 I		授業の種類 (講義) ・ 演習 ・ 実習)		授業担当者 松寄 久実・米岡 学	
授業の回数 15回	時間数 (単位数) 30時間・2単位	配当年次・時期 1年次・前期		必修・選択 選択	
<p>【授業の目的・ねらい】 この授業では、最初に、本学のコンピュータシステム環境について説明し、利用できるようにする。次に Windows の基本操作、タッチタイピング (キーボードを速く正確に入力する技術)、電子メール、インターネットを利用した情報検索などを学習する。そして、ワードプロセッサを学び、文章作成ができるようにする。図形描画機能をマスターし、デジタル画像データ (デジタルカメラの写真など) を利用し、ビジュアル的に見栄えの良い文章を作成できる能力を身につける。さらに、「日商 PC 検定試験」等の資格取得を目指す。</p> <p>【授業終了時の達成課題 (到達目標)】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ワードプロセッサ、電子メール、インターネットを活用できるようにする。 2. ビジュアル的に見栄えの良い文章やポスターを作成し、情報発信できるようにする。 3. 「日商 PC 検定試験」等の資格取得をめざす。 					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. Windows の基本操作 3. タッチタイピングの練習 4. 電子メールの操作と仕組み 5. インターネットの概要と WWW ブラウザの基本操作 6. サーチエンジンの活用と情報検索 7. ワードプロセッサ(1) (Word の基本画面) 8. ワードプロセッサ(2) (基本編集) 9. ワードプロセッサ(3) (書式設定) 10. ワードプロセッサ(4) (文章作成) 11. ワードプロセッサ(5) (表と罫線) 12. ワードプロセッサ(6) (図形描画とオートシェイプ) 13. ワードプロセッサ(7) (組織図とワードアート) 14. ワードプロセッサ(8) (クリップアートとデジタル画像処理) 15. ワードプロセッサ(9) (総合演習) <p>試験・レポート等</p>					
<p>【準備学習】 毎回授業終了時に、次回の授業で行う講義範囲を言うので、教科書を読んで予習してくること。また、授業中に提出できなかった実習課題等は、次回の授業までに完成させて提出すること。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】 「Office2007で学ぶコンピュータリテラシー」 小野目如快著 実教出版 (米岡担当分)</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】 期末試験：40% 提出課題：30% 小テスト等の成績：20% 出席点：10%</p>		

授業のタイトル (科目名) マルチメディア論Ⅱ		授業の種類 (講義)・演習・実習		授業担当者 米岡 学	
授業の回数 15回		時間数 (単位数) 30時間・2単位		配当年次・時期 1, 2年次・後期	
				必修・選択 選択	
<p>【授業の目的・ねらい】 この授業は、前期の「マルチメディア論Ⅰ」を履修した者、またはその履修者と同等の能力を持った者を対象として、進める予定である。この授業は、Excelを用いた表計算処理を学習する。Excelの初心者でも、基本的なところから授業を始めるので、心配しないで受講して欲しい。</p> <p>表計算ソフトには、①表計算処理、②グラフ作成機能、③データベース機能、の三大機能がある。これらの機能をマスターして、様々な表計算処理ができることを目的とする。表計算ソフトは非常に便利なツールであり、実務でもよく使用されているのでしっかりと学習して欲しい。また、日商PC検定試験（データ活用）の資格取得を目指せるように指導する。</p> <p>【授業修了時の達成課題（到達目標）】</p> <p>(1)与えられた課題について、表計算処理ができるようにする。 (2)その表計算結果から、目的にあったグラフを作成できるようにする。 (3)表計算ソフトのデータベース機能をマスターして、情報管理ができるようにする。 (4)日商PC検定試験（データ活用）の資格取得を目指す。</p>					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. 基本入力(1) 3. 基本入力(2) 4. 表の作成(1) 5. 表の作成(2) 6. 表の作成(3) 7. 表の作成(4) 8. グラフ(1) 9. グラフ(2) 10. データベース(1) 11. データベース(2) 12. 関数(1) 13. 関数(2) 14. 集計(1) 15. 集計(2) <p>試験・レポート等</p>					
<p>【準備学習】 毎回授業終了時に、次回の授業で行う講義範囲を言うので、教科書を読んで予習してくること。また、授業中に提出できなかった実習課題等は、次回の授業までに完成させて提出すること。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】 「Office2007で学ぶコンピュータリテラシー」 小野目如快著 実教出版</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】 期末試験：40% 提出課題：30% 小テスト等の成績：20% 出席点：10%</p>		

授業のタイトル (科目名) マルチメディア演習基礎Ⅱ		授業の種類 (講義・ 演習 ・実習)		授業担当者 米岡 学	
授業の回数 15回	時間数 (単位数) 30時間・1単位	配当年次・時期 1年次・後期		必修・選択 選択	
<p>[授業の目標・ねらい] 表計算ソフトウェアが操作できるようになること。</p> <p>[授業全体の内容の概要] 表計算ソフトウェアの基本的な概念を理解し、エクセルの操作法を習得する。</p> <p>[授業終了時の達成課題 (到達目標)] 表にデータを入力、基本的な関数を使って計算処理を実行、グラフを作成、表に罫線を作成する、データを検索し、整列する、ワープロソフトで表のデータを活用、以上ができるようになる。</p>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 表計算ソフトウェア入門 エクセルの画面要素とツールバーの機能 2. データ入力と便利な機能① 数値・文字の入力 3. データ入力と便利な機能② オートフィルタ機能の活用 4. 式の設定と関数の利用① 計算式の設定 5. 式の設定と関数の利用② 統計関数の利用 6. 式の設定と関数の利用③ 数学関数の利用 7. 式の設定と関数の利用④ 財務関数の利用 8. グラフの作成① 棒グラフとグラフ要素の名称と意味 9. グラフの作成② 折れ線グラフと円グラフの作成 10. グラフの作成③ 複合グラフの作成 11. データの管理① 整列と検索 12. データの管理② オートフィルタの機能の活用 13. ピボットテーブルによるデータの集計 14. 図形描画ツールの操作と印刷 15. ワープロソフトとのデータ共有と活用 <p>授業到達目標達成度判定の筆記・実技試験</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献] 毎回プリントを配布</p> <p>(参考文献) 「できるエクセル」インプレス</p>			<p>[単位認定の方法及び基準] (試験やレポートの評価基準)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 復習テスト(3回)：60% 2. 演習課題：30% 3. 出席点：10% 		

授業のタイトル (科目名) ウェブデザイン論		授業の種類 (講義)・演習・実習)		授業担当者 米岡 学	
授業の回数 15回	時間数 (単位数) 30時間・2単位	配当年次・時期 1, 2 年次・後期	必修・選択 選択		
<p>【授業の目的・ねらい】 この授業では、まず、Web ページを作成するところから始める。次にデジタルデータ (静止画・動画・音声・音楽データなど) を扱い、見やすく、使いやすいデザインの Web ページを作成する方法を習得する。また、Web ページを作成、使用する際に発生する著作権等の説明をして、違法コピーやコンテンツ (内容) の無断引用などが犯罪になることを学ぶ。複数の Web ページを整理管理したものを Web サイトと言う。その Web サイトの設計・更新・削除等の管理方法についても学習する。さらに、「Web 検定」等の資格取得を目指す。コンピュータ教室で Web ページ作成に関する操作方法や技術について解説をした後、コンピュータで実習しながら理解させ、授業を進めていく。前半は、Web ページ作成ソフト (ホームページビルダー等) を使用して、Web ページ、Web サイトを作成する。そして、後半は、「Web 検定」等の資格取得をめざした知識と技術について学習する。</p> <p>【授業修了時の達成課題 (到達目標)】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Web ページ作成ソフトウェアを理解し、活用できるようになる。 2. 「Web 検定」等の資格取得をめざす。 3. 使いやすい Web サイトを構築し、情報を発信できるようになる。 					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. Web ページ作成ソフトウェアによる Web サイト作成(1) 3. Web ページ作成ソフトウェアによる Web サイト作成(2) 4. Web ページ作成ソフトウェアによる Web サイト作成(3) 5. Web ページ作成ソフトウェアによる Web サイト作成(4) 6. Web ページ作成ソフトウェアによる Web サイト作成(5) 7. Web ページ作成ソフトウェアによる Web サイト作成(6) 8. Web ページ作成ソフトウェアによる Web サイト作成(7) 9. 小テスト 10. Web の基礎知識 11. インターネットビジネス 12. プロジェクトマネジメント 13. Web サイトの企画・設計 14. 制作 (デザイン・実装) 15. 集客施策 <p>期末試験 (「Web 検定」合格を意識した内容で出題)</p>					
<p>【準備学習】 毎回授業終了時に、次回の授業で行う講義範囲を言うので、教科書を読んで予習しておくこと。また、授業中に提出できなかった実習課題等は、次回の授業までに完成させて提出すること。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】 「30時間でマスター ホームページビルダー」 実教出版編修部編 実教出版</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】 期末試験：40% 提出された課題：30% 小テストの成績：20% 出席点：10%</p>		

授業のタイトル(科目名) マルチメディア演習応用 A		授業の種類 (講義・演習・実習)		授業担当者 米岡 学	
授業の回数 15回	時間数(単位数) 30時間・1単位	配当年次・時期 2年次・後期		必修・選択 選択	
<p>【授業の目的・ねらい】</p> <p>この授業では、最初に Web ページを作成する基本的な技術を学習する。次にデジタル画像(静止画・動画) データやデジタル音声・音楽データなどを扱い、センスが良く、使いやすいデザインの Web ページを作成する。また、デジタルデータを作成、使用する際に発生する著作権等の説明をして、違法コピーやコンテンツ(内容)の無断引用などが犯罪になることを学習する。複数の Web ページを整理管理してまとめたものを Web サイトと呼ぶ。その Web サイトの設計・更新・削除などの管理について学習する。さらに、インターネットや LAN (Local Area Network) などの技術について詳しく理解する。</p> <p>【授業終了時の達成課題(到達目標)】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. HTML をマスターし、簡単な Web ページを作成できるようになる。 2. マルチメディアデータを理解して活用できるようになる。 3. Web ページ作成ソフトウェアを理解して活用できるようになる。 4. 使いやすい Web サイトを構築し、情報を発信できるようになる。 5. インターネットや LAN を理解し、活用できるようになる。 					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. HTML による Web 作成(1) 3. HTML による Web 作成(2) 4. HTML による Web 作成(3) 5. HTML による Web 作成(4) 6. HTML による Web 作成(5) 7. HTML による Web 作成(6) 8. Web ページ作成ソフトウェアによる Web サイト作成(1) 9. Web ページ作成ソフトウェアによる Web サイト作成(2) 10. Web ページ作成ソフトウェアによる Web サイト作成(3) 11. Web ページ作成ソフトウェアによる Web サイト作成(4) 12. Web ページ作成ソフトウェアによる Web サイト作成(5) 13. Web ページ作成ソフトウェアによる Web サイト作成(6) 14. Web サイトの発表会 15. まとめ レポート等 					
<p>【準備学習】</p> <p>毎回授業終了時に、次回の授業で行う講義範囲を言うので、教科書を読んで予習してくること。また、授業中に提出できなかった実習課題等は、次回の授業までに完成させて提出すること。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】</p> <p>「30時間でマスター ホームページビルダー」 実教出版編修部編 実教出版</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】</p> <p>期末試験：40% 提出された課題：30% 小テストの成績：20% 出席点：10%</p>		

授業のタイトル(科目名) マルチメディア演習応用 B		授業の種類 (講義・ 演習 ・実習)		授業担当者 米岡 学	
授業の回数 15回	時間数(単位数) 30時間・1単位	配当年次・時期 2年次・後期		必修・選択 選択	
<p>【授業の目的・ねらい】</p> <p>この授業は、1年次の「マルチメディア演習基礎Ⅱ」を履修した者、またはその履修者と同等の能力を持った者を対象として、進める予定である。この授業は、Excelを用いた表計算処理を学習する。Excelから離れていた者でも、復習しながら授業を進めるので、心配しないで受講して欲しい。</p> <p>表計算ソフトには、①表計算処理、②グラフ作成機能、③データベース機能、の三大機能がある。これらの機能をマスターして、様々な表計算処理ができることを目的とする。表計算ソフトは非常に便利なツールであり、実務でもよく使用されているのでしっかりと学習して欲しい。また、日商 PC 検定試験（データ活用）の資格取得を目指せるように指導する。</p> <p>【授業終了時の達成課題（到達目標）】</p> <p>(1)与えられた課題について、表計算処理ができるようにする。 (2)その表計算結果から、目的にあったグラフを作成できるようにする。 (3)表計算ソフトのデータベース機能をマスターして、情報管理ができるようにする。 (4)日商 PC 検定試験（データ活用）の資格取得を目指す。</p>					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. 基本的な表作成(1) 3. 基本的な表作成(2) 4. 絶対参照 5. 基本的な関数(1) 6. 基本的な関数(2) 7. グラフ(1) 8. グラフ(2) 9. シート分析 10. データベース(1) 11. データベース(2) 12. データベース(3) 13. 関数の活用(1) 14. 関数の活用(2) 15. マルチワークシート <p>試験・レポート等</p>					
<p>【準備学習】</p> <p>毎回授業終了時に、次回の授業で行う講義範囲を言うので、教科書を読んで予習してくること。また、授業中に提出できなかった実習課題等は、次回の授業までに完成させて提出すること。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】</p> <p>「30時間でマスター パーフェクト演習 Excel2007」 バククトレイス著 実教出版</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】</p> <p>期末試験：40% 提出された課題：30% 小テストの成績：20% 出席点：10%</p>		

授業のタイトル (科目名) エッセンシャルスタディ I		授業の種類 (講義)・演習・実習	授業担当者 高松節子・平澤泰子・福島猛行・松寄久実	
授業の回数 15回	時間数 (単位数) 30時間・2単位	配当年次・時期 1年次・前期	必修・選択 必修	
<p>【授業の目的・ねらい】</p> <p>①介護福祉士として働く現場を知る ②基礎となる読解力・表現力・コミュニケーションの方法を学ぶ ③自己学習の習慣をつける</p> <p>【授業全体の内容の概要】</p> <p>介護福祉士になるための基礎を先輩の話をお聴くことによって学ぶ 専門用語の読み方や情報収集の方法・文章のまとめ方を学ぶ</p> <p>【授業終了時の達成課題 (到達目標)】</p> <p>介護の福祉の仕事を知り、利用者の方や施設について学んだことを自分の言葉で表現できるようになる</p>				
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. エッセンシャルスタディ I の学習計画の説明と自己紹介 2. 学内ツアー、図書館の利用方法を学ぶ 3. 漢字の統一テスト 4. 介護福祉の仕事先輩の話をお聴いて知る 5. 介護福祉の仕事を書籍やインターネットの資料から学ぶ 6. 自分の介護福祉士像をイメージする 7. 専門用語の読み書きを学ぶ 8. インターネットの検索・情報収集を学ぶ 9. 新聞記事やエッセイを読み、それを要約する 10. 国家試験のミニ模試 11. 介護実習に備えて言葉使いを学ぶ 12. 介護実習に備えてレポートの書き方を学ぶ 13. 介護実習に備えて電話のかけ方やマナーを学ぶ 14. お礼状の書き方を学ぶ 15. 実習先への対応の仕方を発表する <p>試験</p> <p>* 学力向上を目的とした補習がある</p>				
<p>【準備学習】</p> <p>授業計画予定表に基づき、学習内容を把握し準備する</p>				
<p>【使用テキスト・参考文献】</p> <p>『大学生からのスタディ・スキルズ』</p>		<p>【単位認定の方法及び基準】</p> <p>期末試験、平常点を総合したものが評価の対象となります。</p> <p>試験：60% 平常点：40%</p>		

授業のタイトル (科目名) エッセンシャルスタディⅡ		授業の種類 (講義)・演習・実習		授業担当者 高松節子・平澤泰子・福島猛行・松寄久実	
授業の回数 15回	時間数 (単位数) 30時間・2単位	配当年次・時期 1年次・後期		必修・選択 必修	
<p>【授業の目的・ねらい】 データの収集と分析、レポートの作成、各自のライフデザインの作成によって介護福祉士として活動する基礎的な技術と意識を作る。</p> <p>【授業全体の内容の概要】 データの収集の方法と、エクセルを活用して基本的な分析の方法を学ぶ。ワードを活用してレポートの作成に関する技術を習得する。ライフデザインを考え一生の仕事として介護福祉士の資質をどのように高めるかを考える。</p> <p>【授業修了時の達成課題 (到達目標)】 レポートが作成できるようになる。各自の一生をデザインし表現できるようになる。</p>					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. データ収集の方法 2. データの作成と分析① 3. データの作成と分析② 4. データの作成と分析③ 5. レポートの作成について学ぶ① レポート作成の基本知識 6. レポートの作成について学ぶ② インターネットでの情報の収集 7. レポートの作成について学ぶ③ ワード基本機能 8. レポートの作成について学ぶ④ ワードの段組み・インデント機能 9. レポートの作成について学ぶ⑤ ワードの書式の設定 10. 国家試験のミニ模試 11. 各自のレポート作成 12. 各自のレポート作成 13. ライフデザイン① 各自の生き方を考える 14. ライフデザイン② プリゼンテーション 15. ライフデザイン③ 先輩、就職指導から学ぶ <p>試験 * 学力向上を目的とした補習がある</p>					
<p>【準備学習】 授業計画予定表に基づき、学習内容を把握し準備する</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】 『大学生からのスタディ・スキルズ』</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】 期末試験、平常点を総合したものが評価の対象となります。 試験：60% 平常点：40%</p>		

授業のタイトル (科目名) キャリアデザイン I		授業の種類 (講義・演習・実習)		授業担当者 平澤泰子・福島猛行・加藤英池子・ 山本みよ子・岡田圭祐・高木剛・ 嶋田美津江	
授業の回数 15回	時間数 (単位数) 30時間・1単位	配当年次・時期 2年次・後期		必修・選択 選択	
<p>【授業の目的・ねらい】 介護福祉士として社会で活躍するために、一年生と二年生で学習した知識を総合的に活用する力を養う。</p> <p>【授業全体の内容の概要】 4回の実習を踏まえて、大学での講義や演習がどのような意味をもっていたのか、実践と関連づけながら学習の振り返りを行う。事例等から多面的な知識が求められていることを知り、知識を丁寧に整理し習得し、あらゆる可能性を駆使して利用者を理解することの大切さを学ぶ。</p> <p>【授業修了時の達成課題 (到達目標)】 介護におけるあらゆる場面で適切な対応ができる知識と技術を習得している。</p>					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 介護実習の振り返り 2. 人間と社会①：人間と尊厳 3. 人間と社会②：人間関係とコミュニケーション 4. 介護①：介護の基本・尊厳を支えるケア 5. 介護②：介護の基本・介護実践における連携 6. 事例による検討 7. まとめ・小テスト 8. 介護③生活支援技術Ⅰ：生活支援・居住環境・身じたく 9. 介護④生活支援技術Ⅱ：食事・清潔・排泄・移動 10. 介護⑤生活支援技術Ⅲ：安眠・終末期 11. 介護⑥コミュニケーション技術：介護におけるコミュニケーション 12. 事例による検討 13. 問題演習Ⅰ 14. 福祉現場の問題と解決（人間と社会に関する新聞記事の切り抜き・発表・論議） 15. 福祉現場の問題と解決（介護に関する新聞記事の切り抜き・発表・論議） <p>試験</p>					
<p>【準備学習】 介護実習の体験の中で、「人間と社会」「介護」を振り返り、良かった点をあげ、更に良くするための工夫を考察しておくことが必要である。また悪かった点については、改善策を考え本授業を受けることが望ましい。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】 毎回プリントを配布 新・介護福祉士養成講座 中央法規出版</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 期末テスト：50% 2. 全小テスト：30% 3. 平常点(出席・授業態度)：20% 		

授業のタイトル (科目名) キャリアデザインⅡ		授業の種類 (講義・演習・実習)		授業担当者 平澤泰子・福島猛行・加藤英池子・ 山本みよ子・岡田圭祐・高木剛・ 嶋田美津江	
授業の回数 15回	時間数 (単位数) 30時間・1単位	配当年次・時期 2年次・後期		必修・選択 選択	
<p>[授業の目的・ねらい] 社会制度と社会資源のなかで、介護福祉士としての仕事を主体的に考える力を養う。</p> <p>[授業全体の内容の概要] 介護福祉・保健等の制度、社会制度全体の枠組みを理解し、諸制度の変化をリアルタイムに吸収する姿勢を涵養する。他職種とチームとして仕事をするために、各分野の専門性を理解し、介護職のあり方について、先輩等から学び、各自のキャリア形成について考え、福祉に対する幅の広い視点を形成する。また、新聞の切り抜き・書き抜き・考察を1年生に引き続き行い、互いの考えの違いを理解する姿勢を涵養する。</p> <p>[授業修了時の達成課題 (到達目標)] 制度や他職種の専門性について理解し、広い視点で物事を理解する姿勢ができています。</p>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 介護⑦介護過程：介護過程の展開方法 2. 介護⑧介護過程：介護過程の展開の文字化と他職種連携 3. 人間と社会③：社会の理解 4. 人間と社会④：制度の理解 5. 事例による検討 6. まとめ・小テスト 7. ころとからだのしくみ①：発達と老化の理解 8. ころとからだのしくみ②：認知症の理解 9. ころとからだのしくみ③：障害の理解 10. ころとからだのしくみ④：ころとからだのしくみ 11. 事例による検討 12. 問題演習Ⅱ 13. 問題演習Ⅲ 14. 福祉現場の問題と解決（介護・人間と社会に関する新聞記事の切り抜き・発表・論議） 15. 福祉現場の問題と解決（ころとからだのしくみに関する新聞記事の切り抜き・発表・論議） <p>試験</p>					
<p>[準備学習] 社会の諸制度の変化をリアルタイムに吸収する姿勢が涵養するため、新聞等を読むことが肝要である。新聞等を切り抜き、それを用いて学習していくことが望ましい。</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献] 毎回プリントを配布 新・介護福祉士養成講座 中央法規出版</p>			<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 期末テスト：50% 2. 全小テスト：30% 3. 平常点（出席・授業態度）：20% 		

介護福祉科目 (人間と社会)

授業のタイトル (科目名) 人間の尊厳と自立		授業の種類 (講義)・演習・実習)		授業担当者 黒澤 貞夫	
授業の回数 15回		時間数 (単位数) 30時間・2単位		配当年次・時期 1年次・後期	
				必修・選択 必修	
<p>【授業の目標・ねらい】 人間の理解を基礎として、人間としての尊厳の保持と自立・自律した生活を支える必要性について理解し、介護場面における倫理的課題について対応できるための基礎となる能力を養う。</p> <p>【授業全体の内容の概要】 人間の尊厳について、歴史的経緯を学ぶとともに、現代社会における法制度や社会の構造、人びとの意識について学ぶ。 そして生活支援における自立・自律の考え方、技術等についての基本的事項を学び、介護実践に活かせる能力を養う。</p> <p>【授業終了時の達成課題 (到達目標)】 介護福祉士としての基礎的な人格の態度を養う。特に共感的な態度を持って介護を行なうことができる。人権の基本的理解のうえに、権利擁護及び職業倫理を学び身につける。</p>					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 人間の尊厳と自立の意義 2. 介護は人間の尊厳と自立に基づいて行なわれることの意義 3. 介護における人間の尊厳の保持・自立支援とライフステージのニーズの関係 4. 利用者のニーズ充足の過程における人間の尊厳と自立 5. 健康の維持・増進のニーズ 6. 生活の安全と安心のニーズ 7. 人間尊重から自己実現のニーズ 8. 人権の歴史における人間の尊厳の誕生と発展 9. 基本的人権としての幸福追求権・個人の尊重と介護福祉の理念 10. ICF (国際生活機能分類) における人間の尊厳と自立の関係 11. 医学モデルから生活モデルへの変遷における人間の尊厳と自立 12. 利用者の多面的理解に関わる人間の尊厳と自立 13. 介護福祉士の倫理 14. 権利擁護・アドボカシー 15. 人間の尊厳と自立に関わる事例 <p>〈試験〉</p>					
<p>【準備学習】 テキストで学習します。前もって次の授業の範囲を示すので、予習しておいて下さい。そして授業後は復習するように心掛けて下さい。その際ノートで整理しておくことが大変役に立ちます。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】 (使用テキスト) 「人間の尊厳と自立」黒澤貞夫著 建帛社 (参考文献) 「人間科学的生活支援論」 黒澤貞夫著 ミネルヴァ書房</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】 1. 期末試験：70% 2. 中間テスト：30%</p>		

授業のタイトル (科目名) 人間関係とコミュニケーション		授業の種類 (講義)・演習・実習		授業担当者 岡田 圭祐	
授業の回数 15回		時間数 (単位数) 30時間・2単位		配当年次・時期 1年次・前期	
				必修・選択 必修	
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・介護実践のために必要となる人間関係の理解や、他者への情報の伝達に必要な基礎的なコミュニケーションの能力を養う。 ・利用者に対するコミュニケーション、他職種協働でチームケアを進める際に必要となるコミュニケーション能力の基礎的理解を養う。 <p>[授業全体の内容の概要]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人間関係の理解を基礎に、コミュニケーションの構造的を分析的に理解するように支援する。介護福祉士として、援助関係形成のためのコミュニケーションの基礎的知識を備えるようにする。 <p>[授業修了時の達成課題 (到達目標)]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己覚知、他者理解を学び、人間関係の形成のための基盤を理解できる。 ・コミュニケーションを形成している構成要素を理解する。 ・援助形成のために必要となるコミュニケーション基礎知識を習得する。 					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 人間関係の形成① 自己覚知、他者理解とは何か 2. 人間関係の形成② 人間関係を理解するために 3. コミュニケーションの基礎的理解① 対人関係とコミュニケーションの概要 4. コミュニケーションの基礎的理解② 対人関係とコミュニケーションの意義 5. コミュニケーションの基礎的理解③ コミュニケーションを促すための環境づくり 6. コミュニケーション技法① 距離のもち方 (心理的距離と物的距離について) 7. コミュニケーション技法② 言語的コミュニケーションの有効的な活用 8. コミュニケーション技法③ 非言語コミュニケーションの有効的な活用 9. コミュニケーション技法④ 援助関係形成のための援助者としての基本的態度 10. 道具を用いた言語的コミュニケーションの活用 11. コミュニケーションの実際① 特別養護老人ホームにおける事例 12. コミュニケーションの実際② 老人デイサービスセンター利用者の事例 13. コミュニケーションの実際③ 障害がある人の多様なコミュニケーション 14. 場面別でのコミュニケーションの活用① 15. 場面別でのコミュニケーションの活用② <p>まとめ・評価</p>					
<p>[準備学習]</p> <p>学生諸君が予習してくる事を前提に授業を行うので、予習は必須である。また授業で学習したことを、自ら繰り返し練習することが望ましい。</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献]</p> <p>「人間関係とコミュニケーション」建帛社</p>			<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <p>(試験やレポートの評価基準など)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 期末テスト：50% 2. 提出物・小テスト：30% 3. 授業態度 (出席含む)：20% 		

授業のタイトル(科目名) 社会の理解 I		授業の種類 (講義)・演習・実習		授業担当者 岡田 圭祐	
授業の回数 15回	時間数(単位数) 30時間・2単位	配当年次・時期 1年次・前期		必修・選択 必修	
<p>【授業の目的・ねらい】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 個人が自立した生活を営むということを理解するため、個人、家族、近隣、地域、社会の単位で人間を捉える視点を養い、人間の生活と社会の関わりや、自助から公助に至る過程について理解する。 2 わが国の社会保障の基本的な考え方、歴史と変遷、しくみについて理解する学習とする。 <p>【授業全体の内容の概要】</p> <p>人間の生活と社会の関わり、自助から公助に至る過程を理解することにより、個人が自立した生活を営むということは何かを考え、理解すると共に、わが国における社会保障システムについても理解を深める。</p> <p>【授業修了時の達成課題(到達目標)】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 個人が自立した生活を営むということは何かを理解する。 2 わが国の社会保障システムについて理解する。 					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 生活と福祉(1) 家族生活の基本機能 2. 生活と福祉(2) 家族 3. 生活と福祉(3) 地域 4. 生活と福祉(4) 社会、組織 5. 生活と福祉(5) ライフスタイルの変化 6. 生活と福祉(6) 社会構造の変容 7. 生活と福祉(7) 生活支援と福祉 8. まとめ 9. 社会保障制度(1) 社会保障の基本的な考え方 10. 社会保障制度(2) 日本の社会保障制度の発達(日本の社会保障の基本的な考え方) 11. 社会保障制度(3) 日本の社会保障制度の発達(憲法と社会保障) 12. 社会保障制度(4) 日本の社会保障制度の発達(国民皆保険、国民皆年金、その他) 13. 社会保障制度(5) 日本の社会保障制度の発達(社会保障の現状と今後の展望) 14. 社会保障制度(6) 日本の社会保障制度のしくみの基礎的理解 15. 社会保障制度(7) 現代社会における社会保障制度 <p>まとめと評価</p>					
<p>【準備学習】</p> <p>学生諸君が予習してくる事を前提に授業を行うので、予習は必須である。また授業で学習したことを、自ら繰り返し練習することが望ましい。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】</p> <p>「社会と制度の理解」中央法規出版</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】</p> <p>(試験やレポートの評価基準など)</p> <p>出席状況、レポート、学期末テストを総合的に判断する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 期末テスト：50% 2. 提出物・小テスト：30% 3. 授業態度(出席含む)：20% 		

授業のタイトル (科目名) 社会の理解Ⅱ		授業の種類 (講義)・演習・実習)		授業担当者 平澤 泰子	
授業の回数 15回		時間数 (単位数) 30時間・2単位		配当年次・時期 1年次・後期	
				必修・選択 必修	
<p>【授業の目標・ねらい】</p> <p>1 介護に関する近年の社会保障制度の大きな変化である介護保険制度と障害者自立支援制度について、介護実践に必要な観点から基礎的知識を習得する。</p> <p>2 介護実践に必要なとされる観点から個人情報保護や成年後見制度などの基礎的知識を習得する。</p> <p>【授業全体の内容の概要】</p> <p>介護に関する近年の社会保障制度の大きな変化に関して理解を深め、介護保険制度と障害者自立支援制度について、介護実践に必要な観点から基礎的知識を習得するとともに、個人情報保護や成年後見制度等についても理解を深める。</p> <p>【授業修了時の達成課題 (到達目標)】</p> <p>1 介護保険制度や障害者自立支援制度について、基礎的知識を習得する。</p> <p>2 個人情報保護や成年後見制度などの基礎的知識を習得する。</p>					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】</p> <p>コマ数</p> <p>[高齢者に関する制度]</p> <p>1. 介護保険制度① 介護保険制度創設の背景及び目的</p> <p>2. 介護保険制度② 介護保険制度の動向</p> <p>3. 介護保険制度③ 介護保険制度のしくみの基礎的理解</p> <p>4. 介護保険制度④ 介護保険制度における組織、団体の役割</p> <p>5. 介護保険制度⑤ 介護保険制度における専門職の役割</p> <p>6. 介護実践に関連する諸制度① 個人の権利を守る制度、生活保護制度</p> <p>7. 介護実践に関連する諸制度② 介護と関連領域との連携、保健医療福祉に関する政策</p> <p>8. まとめ・評価</p> <p>[障害がある人に関する制度]</p> <p>9. 障害者自立支援制度① 障害者自立支援制度創設の背景</p> <p>10. 障害者自立支援制度② 障害者自立支援制度の目的</p> <p>11. 障害者自立支援制度③ 障害者自立支援制度の仕組み：サービスの種類と体系</p> <p>12. 障害者自立支援制度④ 障害者自立支援制度の仕組み：事業所と施設、専門職の役割</p> <p>13. 障害者自立支援制度⑤ 指定サービス事業所、国、都道府県、市町村の機能と役割</p> <p>14. 介護実践に関する諸制度③ 個人の権利を守る制度、生活保護制度</p> <p>15. 介護実践に関する諸制度④ 介護と関連領域との連携、保健医療福祉に関する政策</p> <p>まとめ・評価</p>					
<p>【準備学習】</p> <p>介護保険制度や障害者自立支援制度、そして介護実践に関する諸制度について、教科書で予習しておくことが必要である。また新聞や雑誌などで、多くの今日の情報を提供している。あるいは、役所にはその地域の制度についてのパンフレットが置いてある。教科書の予習とともに、それらの情報を得てくることが望ましい。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】</p> <p>「社会と制度の理解」中央法規出版</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】</p> <p>1. 期末テスト：50%</p> <p>2. 提出物・小テスト：30%</p> <p>3. 授業態度(出席日数等も含む)：20%</p>		

授業のタイトル(科目名) 経営管理論		授業の種類 (講義)・演習・実習		授業担当者 松寄 久実	
授業の回数 15回		時間数(単位数) 30時間・2単位		配当年次・時期 1,2年次・後期	
必修・選択 選択					
[授業の目標・ねらい] <p>今日、福祉施設は経営改善が社会的に求められています。他の組織と競争しながら、福祉サービスを効率的に提供して、社会的使命をはたすために、どのような経営管理が必要となってくるのかを学びます。</p>					
[授業全体の内容の概要] <p>まず、経営とは何かを学び、福祉活動をする人々を導く経営戦略、福祉組織の作り方、市場との対応を考えるマーケティング理論を学びます。</p>					
[授業修了時の達成課題(到達目標)] <p>経営戦略とは何であるのか、なぜ、経営戦略は必要であるのか、どのような視点から経営戦略は立案されるべきであるのか、マーケティングの基本はなにであるのか、理論組織をデザインするときの大切なことはなにであるかが理解されていること。</p>					
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数					
<ol style="list-style-type: none"> 1. 経営管理とは① コンピュータ企業の事例から 2. 経営管理とは② 福祉施設の事例から 3. 経営戦略論① ポジショニング 4. 経営戦略論② 人事管理戦略 5. 経営戦略論③ ネットワーク戦略 6. 経営戦略論④ 財務管理戦略 7. 経営組織論① 機能別組織と事業部別組織 8. 経営組織論② リーダーの役割 9. 経営組織論③ 中間管理職の役割 10. 経営組織論④ チームビルディングの技術 11. モチベーション理論① 基礎理論 12. モチベーション理論② 福祉施設におけるモチベーション管理 13. マーケティング理論① 市場の概念 14. マーケティング理論② 製品差別化 15. マーケティング理論③ 市場細分化 					
試験					
[準備学習] <p>授業の資料が事前に配布されるので、プリントで準備学習をすることを前提に授業が行われる。参考文献も読むことが望ましい。</p>					
[使用テキスト・参考文献] 毎回プリントを配布 (参考文献) 高間邦男著『学習する組織』光文社 関島康雄著『チームビルディングの技術』 日本経団連出版			[単位認定の方法及び基準] <ol style="list-style-type: none"> 1. 復習テスト 3回:60% 2. 出席点および復習課題:40% 		

授業のタイトル (科目名) 生物学		授業の種類 (講義)・演習・実習		授業担当者 村上 志緒	
授業の回数 15回		時間数 (単位数) 30時間・2単位		配当年次・時期 1, 2年次・後期	
				必修・選択 選択	
<p>[授業の目標・ねらい] 人間を理解する上で、人間の持つ機能・現象を知り、「生命体・人間」が生物の一員であることの認識を深めてもらう。人間の持つ生物としての普遍性や特異性を理解し、他の生物との関わりから「社会」が構築される理由を人間社会に置き換え、「社会 (コミュニティ)」の必要性を理解してもらう。</p> <p>[授業全体の内容の概要] 生物が生きるために必要な物質、機能・現象を紹介し、生命活動を知ることにより、いかに他の (社会的) 環境が整っていないと活動が困難かを知る。</p> <p>[授業修了時の達成課題 (到達目標)] 人間を中心に生物の生命活動を解説し、「生きる」ために人間や他の生物がどのように相互作用して「生きている」かを知り、生きるための「介護」の重要性を考える。</p>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 生物とは：生物の基本的性質を考える 2. 生体物質：生物学に属す各分野の内容説明と全体像 3. 分子生物・DNA：生体物質で必要なタンパク質合成のためのアミノ酸の結合順の情報としてのDNA・RNA 4. 分子生物・DNA：個々の生物種保存を目的とする生物の子孫への伝達情報としてのDNA・RNA 5. 遺伝：生物個々の特徴を正確に伝えるためのDNA・RNAを使った遺伝 6. 生化学・呼吸：生物が活動エネルギーを得るために行う有機物代謝のメカニズム 7. 生化学・光合成：植物の葉緑体における太陽エネルギーの固定と有機物合成経路 8. 細胞：生物の細胞内にある小器官とその機能、細胞の死滅に伴う増殖手段 (細胞分裂) 9. 生殖：生物の生殖における配偶子の有無 (有性生殖と無性生殖)、配偶子形成に伴う生殖細胞の分裂 (減数分裂) 10. 発生：有性生殖を行う生物における受精後の発生機構と発生段階 11. 生理・内分泌：生物体内における各器官での代謝調節、制御機構を遠隔コントロールする物質 (ホルモン) 12. バイオテクノロジー：DNAの重要度、バイオテクノロジーとその応用の多様性と現状 13. 生態・食物連鎖：生物同士のかかわりあい (捕食・被食の関係) 14. 生態・地球環境：地球環境と生物の関係、生物同士の関係、人間が変えてしまった地球全体の環境問題 15. 総括：生物学の今後の展望と問題点 <p>期末試験</p>					
<p>[準備学習] 中学校で学習した理科生物、高等学校で選択した学生は高等学校で学習した生物学の概要を把握しておくことで理解が深まります。また身近な生き物や生活の中で触れる生物関連のニュース (生物多様性、遺伝子組み換えなど) に関心を持つようにしましょう。</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献] 授業時間内に関連資料を配布。</p> <p>(参考文献) 『基礎から学ぶ生物学・細胞生物学』 和田勝著・羊土社</p>			<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 期末試験：60% 2. 出席を含めた平常点：40% 		

授業のタイトル (科目名) 生活環境学		授業の種類 (講義)・演習・実習)		授業担当者 永富 聡	
授業の回数 15回	時間数 (単位数) 30時間・2単位	配当年次・時期 1, 2年次・前期	必修・選択 選択		
<p>【授業の目的・ねらい】 21世紀は、環境の世紀といわれる。温暖化はじめ酸性雨、オゾン層の破壊、森林の減少など環境問題は複雑多岐にわたる。その基本は、地球上の全ての生物種の生命を守ることである。この講座では、身近な「生活」というフィルターを通して、環境問題を考え、できることから実践することを目的にしている。</p> <p>【授業全体の内容の概要】 重病状態の地球と環境問題を概観した後、身のまわりのゴミ、水、飲料、エネルギー、住宅など具体的な事例を多用しながら興味深く学ぶ。また、講師が制作したビデオ、スライドなども使用する。</p> <p>【授業修了時の達成課題 (到達目標)】 社会人になっても、現代を生きる人間としての基本的な知識・情報を身につけてもらうと同時に、地球に生存する175万種の生命の尊厳を考え、換気用に負荷を与えない「エコ人間」として行動してもらいたい。環境社会検定試験を受検・合格できる実力を養成したい。</p>					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 地球環境と生態系 2. 地球と自然環境(1) 大気・海・川の役割 3. 地球と自然環境(2) 土壌と森林の役割 4. 公害問題はこうして始まった 5. 大量生産・大量消費・大量廃棄とゴミ問題 6. 水と食の安全・安心を考える 7. エネルギー自給率4%って？ 8. 地球温暖化と京都議定書 9. 省エネルギー生活術 10. レジ袋をめぐる国内外の動き 11. エコ住宅とエコ自動車 12. グリーンコンシューマーをめざして 13. 企業の社会的責任 (CSR) とは？ 14. 21世紀の目標「持続可能な社会」づくり 15. 総括 <p>試験</p>					
<p>【準備学習】 講義時に基本的には次回講義に用いるプリントを配布するため、予習として関連するテキストの箇所を一読しておく。その他、日頃から環境問題に関する新聞記事に目を通しておくこと(レポート課題となる)。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】 環境社会検定公式テキスト改訂2版 (東京商工会議所編)</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】 (試験やレポートの評価基準など) 出席：20% レポート(2回)：20% 期末試験：60%</p>		

授業のタイトル (科目名) 現代居住環境論		授業の種類 (講義)・演習・実習		授業担当者 近藤 ふみ	
授業の回数 15回		時間数 (単位数) 30時間・2単位		配当年次・時期 2年次・後期	
				必修・選択 選択	
<p>【授業の目標・ねらい】 介護実践に必要な知識という観点から住生活の意義を理解し、介護者に求められる基礎的知識および技術を講義と実習をとおして学ぶ。</p> <p>【授業全体の内容の概要】 本講義では、住居が担う役割や機能、快適な住生活を営むための維持管理などについて基礎的な知識を身につけることを目的とする。その上で、高齢者や障害者の自立支援に結びつく住環境整備のための知識の習得を目指す。住生活を自分自身の生活に置き換えて捉え、介護の現場に結び付けて考えていく。</p> <p>【授業修了時の達成課題 (到達目標)】</p> <p>①住居の役割と機能、生活行動と空間、室内環境、住居の管理と安全についての基礎を理解し、説明できる。 ②高齢者や障害者の住生活の特徴を理解し、基本的な配慮や安全について説明できる。 ③高齢者や障害者に関する住政策の変遷を理解し、説明できる。 ④住まいと地域のかかわりについて理解し、説明できる。</p>					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 住まいの役割と機能 2. ライフサイクルと住まい 3. 住まいの計画 1 (生活空間の計画) 4. 住まいの計画 2 (図面の基礎知識) 5. 快適な室内環境 1 (温熱環境と空気環境) 6. 快適な室内環境 2 (音環境と光環境) 7. 快適な室内環境 3 (ケーススタディ) 8. 住まいの維持管理 9. 住まいの安全 10. 高齢者・障がい者に係る施策、住環境整備 11. 日常生活の基本動作と空間 1 12. 日常生活の基本動作と空間 2 13. 高齢者・障害者に配慮した住環境整備 1 14. 高齢者・障害者に配慮した住環境整備 2 15. 高齢者・障害者に配慮した住環境整備 3 <p>試験、レポート等</p>					
<p>【準備学習】 次の視点で自分の住まいを見直してみましょう。 ①食べる、寝る、入浴する、着替える、勉強する、会話する、移動するなどの生活行為を、住まいのどの場所で行っているか、確認してみましょう。 ②自分にとって、家族にとって、住みやすい環境になっているか、考えてみましょう。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】 テキスト： 「福祉のための家政学」建帛社 中川英子編著 参考文献： 「新版 福祉住環境」 市ヶ谷版社 浅沼由紀、井上剛伸他</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】 (試験やレポートの評価基準など) 試験(レポート)：60% 出席等：40%</p>		

授業のタイトル (科目名) 経済学		授業の種類 (講義・演習・実習)		授業担当者 松崎 久実	
授業の回数 15回	時間数 (単位数) 30時間・2単位	配当年次・時期 1, 2年次・前期		必修・選択 選択	
<p>【授業の目標・ねらい】 経済学の特徴であるモデルを使って、社会的活動を分析する手法を学ぶこと、新聞などの経済活動の報道から情報を入手する練習をすること、そのことについて各自の意見をもってもらうこと。</p> <p>【授業全体の内容の概要】 国民所得の概念、景気循環の理論、ケインズ経済学の理解、シュンペーターの経済学の理解、ソーシャルキャピタルの理論と日本社会のあり方。</p> <p>【授業終了時の達成課題 (到達目標)】 国民所得の基本的な概念が理解されていること、景気循環が発生する機構が理解されていること、ケインズ経済学の基本的な概念が理解されていること、シュンペーターの経済学の基本的な概念が理解されていること、新聞の経済欄の記事を読み、要約し各自の意見を纏めたレポートを作成すること。</p>					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 日本の社会が直面している経済問題 2. 国民所得の概念① 3. 国民所得の概念② 4. 今日の日本経済の実情を新聞から読み取る① 5. ケインズ経済学① 6. ケインズ経済学② 7. ケインズ経済学③ 8. 景気循環の理論① 9. 景気循環の理論② 10. 今日の日本経済の実情を新聞から読み取る② 11. シュンペーターの経済学① 12. シュンペーターの経済学② 13. シュンペーターの経済学③ 14. ソーシャルキャピタルの理論① 社会の連帯の意義 15. ソーシャルキャピタルの理論② 社会の連帯を強める政策 <p>期末試験</p>					
<p>【準備学習】 授業の資料が事前に配布されるので、プリントで準備学習をすることを前提に授業が行われる。参考文献も読むことが望ましい。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】 毎回プリントを配布</p> <p>参考文献： 橋本俊詔著『格差社会』岩波書店 堤未果著『貧困大国アメリカ』岩波書店</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 復習テスト 3回：60% 2. 出席点および復習課題：40% 		

授業のタイトル (科目名) 社会学		授業の種類 (講義)・演習・実習		授業担当者 奥村 育栄	
授業の回数 15回		時間数 (単位数) 30時間・2単位		配当年次・時期 1, 2年次・後期	
				必修・選択 選択	
<p>[授業の目標・ねらい] 現代の社会問題を考察し、その根底にある問題を理解する。社会の中で人間が生きる姿を見つめなおす。</p> <p>[授業全体の内容の概要] 現代社会の重要な問題を事例として取り上げ、社会学的な考察を行う。</p> <p>[授業修了時の達成課題 (到達目標)] 個人を支えている、自我のあり方、人とのかかわり、社会環境からの影響を考察して、人間を多面的に解釈できる能力を養う。</p>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 社会学的なものの見方・考え方と私たち 2. 現代社会の理解 ①社会システム 3. 現代社会の理解 ②戦後の社会変動 4. 現代社会の理解 ③今日の社会変動 5. 現代社会の理解 ④地域社会 6. 現代社会の理解 ⑤社会集団と組織 7. 生活の理解 ①家族 8. 生活の理解 ②ライフスタイルの変化 その1 9. 生活の理解 ③ライフスタイルの変化 その2 10. 人と社会の関係 ①公共性の変化 11. 人と社会の変化 ②行為と役割 12. 人と社会の関係 ③社会的自我 13. 社会問題の理解 ①貧困と社会的排除 14. 社会問題の理解 ②社会病理 15. 社会問題の理解 ③再生産 <p>期末試験</p>					
<p>[準備学習] テキストや配布資料を読んだうえで出席してください。</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献] テキスト： 浅野智彦編著 (2010)『考える力が身につく社会学入門』中経出版 この他に必要な資料等は、講義中に随時配布します。 参考文献： 塩原良和・竹ノ下弘久編 (2010)『社会学入門』弘文堂 高校生のための社会学編集委員会編 (2009)『高校生のための社会学』ハーベスト社</p>			<p>[単位認定の方法及び基準] 出席を含めた授業への取り組み：40% 期末試験：60%</p>		

授業のタイトル (科目名) 憲法		授業の種類 (講義)・演習・実習		授業担当者 横手 逸男	
授業の回数 15回		時間数 (単位数) 30時間・2単位		配当年次・時期 1, 2年次・前期	
				必修・選択 選択	
<p>[授業の目標・ねらい] 憲法は国家の最高法であり、憲法を学び、知識を深めることは、国民として当然の義務ともいえる。本授業では、平和主義、基本的人権、国会・内閣・裁判所などにつき、基本原理や判例・問題点をわかりやすく講義する。日本国憲法の学習を通じて、現代社会の基本的問題についての理解を深め、生活するうえでの問題意識を養うとともに、わが国の社会保障制度の根本理念や法体系についても学んでみよう。</p> <p>[授業全体の内容の概要] 憲法の内容、新旧両憲法の特徴、日本国憲法の三原則を概観したうえで、平和主義や基本的人権、国会、内閣、裁判所などの組織につき、具体的な事件の検討を交えながら、講義をすすめる。特に社会権などの基本的人権については、わが国の社会保障制度の法体系や朝日訴訟・堀木訴訟・尼崎入学拒否訴訟などの生存権関連の判例考察も行う。</p> <p>[授業修了時の達成課題 (到達目標)] 日本国憲法の基礎的知識を取得し、社会福祉の現場において必要不可欠な人権感覚、職業倫理感を養う。</p>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 社会生活と法、国家と憲法、憲法の分類 2. 大日本帝国憲法、日本国憲法の制定の歴史と特色 3. 象徴天皇制、天皇の地位と権限 4. 憲法9条と平和主義 (砂川事件・長沼事件・百里事件) 5. 湾岸戦争、PKO協力法、わが国の防衛政策 6. 基本的人権の歴史と種類、国際社会と基本的人権の保障 7. 法の下での平等 (尊属殺人事件・男女雇用機会均等法) 8. 精神的自由権 (思想・良心の自由、信教の自由・表現の自由・学問の自由) 9. 国務請求権 (請願権・学校事故と国家賠償・冤罪事件と刑事補償) 10. 日本国憲法の社会権の体系とわが国の社会保障制度 11. 生存権 (朝日訴訟・堀木訴訟)、教育権、勤労の権利、労働三権の保障 12. 人身の自由 (奴隷的拘束・苦役の禁止)、死刑制度 13. 国会と内閣 (衆議院と参議院の組織、議院内閣制) 14. 裁判所の組織と役割、司法権の独立 (大津事件・浦和事件) 15. 憲法改正問題 (憲法改正の手続、憲法改正の動き、国民投票法) <p>試験実施</p>					
<p>[準備学習] 毎回の授業の終わりには、次回の授業予定とテキストの範囲を述べます。テキストの該当ページはあらかじめ一読して授業に臨んで下さい。</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献] 「(新訂版) エレメンタリ憲法」 西 修編、横手逸男 他共著、成文堂 (参考書) 三省堂「新六法」2011年度版</p>			<p>[単位認定の方法及び基準] 1. 期末テスト：70% 2. 出席・小テスト：30%</p> <p>[履修者へのメッセージ] 戦争と平和・さまざまな差別・社会保障と社会福祉・犯罪・環境汚染、私達の社会のさまざまな問題を、日本国憲法を通じてみつめてみよう。</p>		

介護福祉科目 (介護)

授業のタイトル (科目名) 介護の基本 I		授業の種類 (講義)・演習・実習		授業担当者 福島 猛行・三井 拓	
授業の回数 30回		時間数 (単位数) 60時間・4単位		配当年次・時期 1年次・通年	
				必修・選択 必修	
<p>【授業の目標・ねらい】</p> <p>①介護を取り巻く社会背景や尊厳の保持・自立生活支援の新しい介護の考え方をもった介護福祉士の役割を理解する。</p> <p>②リハビリテーションの理念・方法を理解し、尊厳の保持・自立支援の観点から介護実践できる能力を養う。</p> <p>【授業全体の内容の概要】</p> <p>①介護福祉士は多様、複雑、高度な介護課題に対応する専門職としての社会的役割を期待されている。まずは介護とは何か、介護を巡る目まぐるしい社会的背景を学び介護福祉士の役割は何かを理解する。</p> <p>②理学療法・作業療法・言語聴覚療法。日常生活活動訓練・自立生活 (IL) 運動等の実質的訓練内容の理解および障害の3段階とその対応の理解。さらには、生活機能分類についても理解を深める。</p> <p>【授業修了時の達成課題 (到達目標)】</p> <p>リハビリテーションの関連他職種とのチームワークによって、身体的・精神的に障害を持つ人に対する全人間的復権の一翼を担える介護職を目指す。</p>					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> オリエンテーション 介護福祉士養成教育課程 介護福祉を取り巻く状況 ①日本の歴史における介護の変遷 介護福祉を取り巻く状況 ②社会福祉制度の中の介護の位置づけ 介護福祉を取り巻く状況 ③介護福祉士制度誕生の背景 介護福祉を取り巻く状況 ④介護福祉士制度と専門職へのあゆみ 介護問題の背景 ①少子高齢化・家族機能の変化 介護問題の背景 ②介護保険制度と自立生活支援 介護問題の背景 ③2015年に向けた尊厳のある介護 介護の概念 (理念・サービスの利用者) 介護の概念 (方法・提供者の資質) 介護の概念 (方法・提供者の資質) 介護福祉士の役割と機能を支えるしくみ ①改正社会福祉士及び介護福祉士法のポイント 介護福祉士の役割と機能を支えるしくみ ②求められる介護福祉士像 介護福祉士の役割と機能を支えるしくみ ③介護福祉士の専門職能団体の活動 <p>試験</p> <ol style="list-style-type: none"> 尊厳を支える介護 (リハビリテーションの理念と基本原則) ①事業の発展と現代社会におけるリハビリテーションの普及 尊厳を支える介護 (リハビリテーションの理念と基本原則) ②リハビリテーションの概念及び基本 尊厳を支える介護 (リハビリテーションの理念と基本原則) ③リハビリテーションにおける総合的サービス体系、リハビリテーション関連職種との役割 <ol style="list-style-type: none"> 障害の過程とその影響 ①老化による機能障害 障害の過程とその影響 ②障害者の身体障害・知覚障害・精神障害・重複障害 障害の過程とその影響 ③障害児の発達心理 自立に向けた介護 (リハビリテーションの展開過程) ①リハビリテーション過程 (相談と事前評価、機能評価、問題点の抽出、プログラム立案、実施、再評価) 自立に向けた介護 (リハビリテーションの展開過程) ②個人特性の把握 自立に向けた介護 (リハビリテーションの展開過程) ③日常生活活動 (ADL) 評価 自立に向けた介護 (リハビリテーションの展開過程) ④職業評価 自立に向けた介護 (リハビリテーションの展開過程) ⑤社会参加の実施 リハビリテーションと介護 ①日常生活の自立支援及び社会生活能力の維持・拡大への援助 リハビリテーションと介護 ②リハビリテーション分野の専門職との連携 (チームアプローチ) 事例研究 障害形態別の事例 事例研究 障害形態別の事例 <p>授業到達目標達成度判定の筆記試験 (記述式) (注) 障害者には障害児も含む</p>					
<p>【準備学習】</p> <p>毎時の課題についてテキストを活用し事前学習をしておくこと。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】</p> <p>「介護の基本 I・II」中央法規</p> <p>医学映像起用行くセンター (ビデオ)</p> <p>「リハビリテーション医学 全16巻」</p> <p>太田仁史監修 (ビデオ)</p> <p>「在宅介護の基礎と実践 全20巻」</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】</p> <p>(試験やレポートの評価基準など)</p> <p>筆記試験及び出席状況により総合的に評価する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 期末テスト：50% 提出物：30% 授業態度：20% 		

授業のタイトル (科目名) 介護の基本Ⅱ		授業の種類 (講義)・演習・実習		授業担当者 高木 剛	
授業の回数 30回		時間数 (単位数) 60時間・4単位		配当年次・時期 1年次・通年	
				必修・選択 必修	
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・援助関係形成のために、介護を必要とする人の生活の視点から生活課題を把握する能力を養う。介護サービスを利用している高齢者や障害者の個別の生活環境を理解し、利用している福祉サービスとその体系を学び、生活に根ざした制度活用の実態を理解する。また、介護福祉士と他の専門職とのチームアプローチの実践の理解をする。 <p>[授業全体の内容の概要]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・介護を必要とする人の理解、介護サービスの体系と課題、介護実践における連携、地域連携について講義する。 <p>[授業修了時の達成課題 (到達目標)]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・介護を必要とする人の多様な生活の実態を理解することができる。 ・介護を必要とする人の生活の理解を踏まえ、介護サービスの種類と活用されている実態、課題を整理することができる。 ・介護福祉士と連携する専門職種を理解し、チームアプローチの実態を理解することができる。 ・地域連携について、インフォーマルサービスの活用の実態、市町村、都道府県の機能と役割を理解することができる。 					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 介護を必要とする人の理解① 人間の多様性、様々な生活の理解 2. 介護を必要とする人の理解② 高齢者の暮らし (核家族化、小家族化、家に対する意識の変化) 3. 介護を必要とする人の理解③ 高齢者の暮らし (就労、雇用、社会活動の実態) 4. 介護を必要とする人の理解④ 障害のある人の暮らし (障害のある人の生活ニーズと多様なくらしのあり方) 5. 介護を必要とする人の理解⑤ 障害のある人の暮らし (生活を支える諸制度) 6. 介護を必要とする人の理解⑥ 介護を必要とする人の生活環境 7. 介護サービスの体系と課題① 介護サービスの概要 (介護保険サービスの種類と体系) 8. 介護サービスの体系と課題② 介護サービスの概要 (ケアプランとケアマネジメント) 9. 介護サービスの体系と課題③ 介護サービスの概要 (介護保険利用の手続きと権利擁護) 10. 介護サービスの体系と課題④ 介護サービス提供の場の特性 (高齢者在宅福祉サービスの種類と特徴) 11. 介護サービスの体系と課題⑤ 介護サービス提供の場の特性 (高齢者在宅福祉サービスの現状と課題) 12. 介護サービスの体系と課題⑥ 介護サービス提供の場の特性 (高齢者施設の種類と特徴) 13. 介護サービスの体系と課題⑦ 介護サービス提供の場の特性 (高齢者福祉サービスの現状) 14. 介護サービスの体系と課題⑧ 介護サービス提供の場の特性 (高齢者福祉サービスの課題) 15. 介護サービスの体系と課題⑨ 介護サービスの概要 (障害者自立支援法のサービスの種類と体系) <p>期末 (前期) テスト</p> <ol style="list-style-type: none"> 16. 介護サービスの体系と課題⑩ 介護サービス提供の場の特性 (障害者在宅福祉サービスの種類と特徴) 17. 介護サービスの体系と課題⑪ 介護サービス提供の場の特性 (障害者在宅福祉サービスの現状と課題) 18. 介護サービスの体系と課題⑫ 介護サービス提供の場の特性 (障害者自立支援法と「施設」の現状と課題) 19. 介護実践における連携① 介護福祉士と連携をする専門職種 20. 介護実践における連携② チームアプローチの意義と目的 21. 介護実践における連携③ 介護福祉士と保健医療職種の連携の実際① 22. 介護実践における連携④ 介護福祉士と保健医療職種の連携の実際② 23. 介護実践における連携⑤ 介護福祉士とその他の関連職種との連携① 24. 介護実践における連携⑥ 介護福祉士とその他の関連職種との連携② 25. 地域連携の目的と意義 26. インフォーマルサービスの機能と活用の実際① (高齢者のくらしとインフォーマルサービス) 27. インフォーマルサービスの機能と活用の実際② (障害のある人のくらしとインフォーマルサービス) 28. 地域包括支援センターの機能と役割 29. 介護を必要とする人と市町村の機能と役割 30. 介護を必要とする人と都道府県の機能と役割 <p>期末 (後期) テスト</p>					
<p>[準備学習]</p> <p>授業は皆さん (学生) が予習してくることを前提に進めるので、授業日までにテキストの該当箇所を読んで内容を把握するとともに、わからない専門用語等は辞典等で調べておいて下さい。</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献]</p> <p>「介護の基本Ⅰ」中央法規 「介護の基本Ⅱ」中央法規</p>			<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 期末テスト：80% 2. 課題・小テスト：10% 3. 平常点：10% 		

授業のタイトル (科目名) 介護の基本Ⅲ		授業の種類 (講義)・演習・実習		授業担当者 高木 剛	
授業の回数 30回		時間数 (単位数) 60時間・4単位		配当年次・時期 2年次・通年	
				必修・選択 必修	
<p>【授業の目的・ねらい】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・介護従事者として必要な倫理観を養う。 ・リスクマネジメント等、利用者の安全・安心に配慮した介護を実践する能力を養う。 ・労働安全等、介護従事者の健康に配慮した介護を実践する能力を養う。 <p>【授業全体の内容の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・介護従事者として必要な倫理観を学び、利用者の安全・安心に配慮した介護について理解すると共に、自らの健康にも配慮した介護についても理解を深める。 <p>【授業修了時の達成課題 (到達目標)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・介護従事者として必要な倫理観を身に付ける。 ・利用者の安全・安心に配慮した介護を実践することができる。 ・介護従事者が自らの健康を管理し、介護を実践することができる。 					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 介護従事者の倫理(1) 職業倫理 (介護従事者の倫理) 2. 介護従事者の倫理(2) 職業倫理 (介護実施の場で求められる倫理) 3. 介護従事者の倫理(3) 利用者の人権と介護 (児童虐待) 4. 介護従事者の倫理(4) 利用者の人権と介護 (障害者虐待) 5. 介護従事者の倫理(5) 利用者の人権と介護 (高齢者虐待) 6. 介護従事者の倫理(6) 利用者の人権と介護 (権利擁護①) 7. 介護従事者の倫理(7) 利用者の人権と介護 (権利擁護②) 8. 介護従事者の倫理(8) プライバシーの保護 (個人情報保護、その他) 9. まとめ 10. 介護における安全の確保とリスクマネジメント(1) 介護における安全の確保 (観察) 11. 介護における安全の確保とリスクマネジメント(2) 介護における安全の確保 (技術) 12. 介護における安全の確保とリスクマネジメント(3) 介護における安全の確保 (予測) 13. 介護における安全の確保とリスクマネジメント(4) 介護における安全の確保 (分析) 14. 介護における安全の確保とリスクマネジメント(5) 事故防止、安全対策 (転倒・転落の防止) 15. 介護における安全の確保とリスクマネジメント(6) 事故防止、安全対策 (骨折予防、その他) 期末 (前期) テスト 16. 介護における安全の確保とリスクマネジメント(7) 事故防止、安全対策 (セーフティマネジメント) 17. 介護における安全の確保とリスクマネジメント(8) 事故防止、安全対策 (緊急連絡システム) 18. 介護における安全の確保とリスクマネジメント(9) 事故防止、安全対策 (防火・防災対策) 19. 介護における安全の確保とリスクマネジメント(10) 事故防止、安全対策 (利用者の生活の安全) 20. 介護における安全の確保とリスクマネジメント(11) 感染対策 (感染予防の意義と介護) 21. 介護における安全の確保とリスクマネジメント(12) 感染対策 (感染予防の基礎知識) 22. 介護における安全の確保とリスクマネジメント(13) 感染対策 (感染予防の技術) 23. 介護における安全の確保とリスクマネジメント(14) 感染対策 (感染管理) 24. 介護における安全の確保とリスクマネジメント(15) 感染対策 (衛生管理) 25. まとめ 26. 介護従事者の安全(1) 介護従事者の身体の健康管理 (感染症予防と対策) 27. 介護従事者の安全(2) 介護従事者の身体の健康管理 (腰痛予防と対策) 28. 介護従事者の安全(3) 介護従事者の心の健康管理 (ストレス) 29. 介護従事者の安全(4) 介護従事者の心の健康管理 (燃え尽き症候群、その他) 30. 介護従事者の安全(5) 労働安全 期末 (後期) テスト 					
<p>【準備学習】</p> <p>授業は皆さん (学生) が予習してくることを前提に進めるので、授業日までにテキストの該当箇所を読んで内容を把握するとともに、わからない専門用語等は辞典等で調べておいて下さい。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】</p> <p>「介護の基本Ⅱ」中央法規</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 期末テスト：80% 2. 課題・小テスト：10% 3. 平常点：10% 		

授業のタイトル (科目名) コミュニケーション技術		授業の種類 (講義・演習・実習)		授業担当者 福島猛行・織田つや子・高梨憲司・森山梅千代・黒田正子・宮田明・河内律子			
授業の回数 30回		時間数 (単位数) 60時間・2単位		配当年次・時期 2年次・通年			
				必修・選択 必修			
<p>[授業の目標・ねらい] 「人間」の理解を基礎として、人間としての尊厳の保持と、自立・自律した生活を支える必要性について理解し、介護場面における倫理的課題について対応できるための基礎となる能力を養う学習とする。</p> <p>[授業全体の内容の概要] 介護関係の形成のために介護におけるコミュニケーションの基礎からそれぞれの利用者の状況・状態に沿ったコミュニケーション技術を学び、チームでの支援のあり方を理解する力を養う。</p> <p>[授業修了時の達成課題 (到達目標)] チーム内におけるコミュニケーションを円滑に行うために、記録、報告、会議などを情報共有の手段として活用できる能力を習得する。</p>							
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数</p> <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> <p>〔Ⅰ〕介護におけるコミュニケーションの基本 福島 1. 介護におけるコミュニケーションの意義、目的、役割 2. 利用者・家族との関係づくり</p> <p>〔Ⅱ〕介護場面における利用者・家族とのコミュニケーション [利用者・家族とのコミュニケーションの実際] 3～7 織田</p> <p>3. 1 話を聴く方法 ー利用者の感情表現を察する技法ー気づき・洞察力など 4. 2 納得と同意を得る技法ー相談・助言・指導ー 5. 3 意欲を引き出す技法 6. 4 利用者本人と家族の以降を図る技法 7. 5 まとめ</p> <p>[利用者の状況・状態に応じたコミュニケーション技術の実際] ・感覚機能が低下している人とのコミュニケーション 8. 視覚障害の人とのコミュニケーション① 高梨 9. 視覚障害の人とのコミュニケーション② 高梨 10. 聴覚障害の人とのコミュニケーション① 福島 11. 聴覚障害の人とのコミュニケーション② 福島 12. 運動機能障害のある人とのコミュニケーション① 森山 13. 運動機能障害のある人とのコミュニケーション② 森山 14. 認知・知覚機能障害のある人とのコミュニケーション① 黒田 15. 認知・知覚機能障害のある人とのコミュニケーション② 黒田</p> <p>評価 福島</p> </td> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> <p>〔Ⅲ〕介護におけるチームのコミュニケーション 21～30 河内</p> <p>16. 知的障害のある人とのコミュニケーション① 宮田 17. 知的障害のある人とのコミュニケーション② 宮田 18. 精神障害のある人とのコミュニケーション① 宮田 19. 精神障害のある人とのコミュニケーション② 宮田 20. まとめ 宮田</p> <p>21. 記録による情報の共有化 その1 介護における記録の意義と目的 22. 記録による情報の共有化 その2 介護に関する記録の種類 23. 記録による情報の共有化 その3 介護記録の方法と留意点・記録の管理 24. 記録による情報の共有化 その4 介護記録の共有化 25. 記録による情報の共有化 その5 情報通信技術 (IT) を活用した介護記録の意義と活用の留意点・個人情報保護について 26. 記録による情報の共有化 その6 介護記録の活用 27. 報告による情報の共有化 介護における報告の意義と目的ー報告・連絡・相談の方法と留意点ー 28. 会議による情報の共有化 その1 介護における会議の意義と目的 29. 会議による情報の共有化 その2 介護における会議の種類と方法・留意点 30. まとめ</p> <p>評価 福島</p> </td> </tr> </table>						<p>〔Ⅰ〕介護におけるコミュニケーションの基本 福島 1. 介護におけるコミュニケーションの意義、目的、役割 2. 利用者・家族との関係づくり</p> <p>〔Ⅱ〕介護場面における利用者・家族とのコミュニケーション [利用者・家族とのコミュニケーションの実際] 3～7 織田</p> <p>3. 1 話を聴く方法 ー利用者の感情表現を察する技法ー気づき・洞察力など 4. 2 納得と同意を得る技法ー相談・助言・指導ー 5. 3 意欲を引き出す技法 6. 4 利用者本人と家族の以降を図る技法 7. 5 まとめ</p> <p>[利用者の状況・状態に応じたコミュニケーション技術の実際] ・感覚機能が低下している人とのコミュニケーション 8. 視覚障害の人とのコミュニケーション① 高梨 9. 視覚障害の人とのコミュニケーション② 高梨 10. 聴覚障害の人とのコミュニケーション① 福島 11. 聴覚障害の人とのコミュニケーション② 福島 12. 運動機能障害のある人とのコミュニケーション① 森山 13. 運動機能障害のある人とのコミュニケーション② 森山 14. 認知・知覚機能障害のある人とのコミュニケーション① 黒田 15. 認知・知覚機能障害のある人とのコミュニケーション② 黒田</p> <p>評価 福島</p>	<p>〔Ⅲ〕介護におけるチームのコミュニケーション 21～30 河内</p> <p>16. 知的障害のある人とのコミュニケーション① 宮田 17. 知的障害のある人とのコミュニケーション② 宮田 18. 精神障害のある人とのコミュニケーション① 宮田 19. 精神障害のある人とのコミュニケーション② 宮田 20. まとめ 宮田</p> <p>21. 記録による情報の共有化 その1 介護における記録の意義と目的 22. 記録による情報の共有化 その2 介護に関する記録の種類 23. 記録による情報の共有化 その3 介護記録の方法と留意点・記録の管理 24. 記録による情報の共有化 その4 介護記録の共有化 25. 記録による情報の共有化 その5 情報通信技術 (IT) を活用した介護記録の意義と活用の留意点・個人情報保護について 26. 記録による情報の共有化 その6 介護記録の活用 27. 報告による情報の共有化 介護における報告の意義と目的ー報告・連絡・相談の方法と留意点ー 28. 会議による情報の共有化 その1 介護における会議の意義と目的 29. 会議による情報の共有化 その2 介護における会議の種類と方法・留意点 30. まとめ</p> <p>評価 福島</p>
<p>〔Ⅰ〕介護におけるコミュニケーションの基本 福島 1. 介護におけるコミュニケーションの意義、目的、役割 2. 利用者・家族との関係づくり</p> <p>〔Ⅱ〕介護場面における利用者・家族とのコミュニケーション [利用者・家族とのコミュニケーションの実際] 3～7 織田</p> <p>3. 1 話を聴く方法 ー利用者の感情表現を察する技法ー気づき・洞察力など 4. 2 納得と同意を得る技法ー相談・助言・指導ー 5. 3 意欲を引き出す技法 6. 4 利用者本人と家族の以降を図る技法 7. 5 まとめ</p> <p>[利用者の状況・状態に応じたコミュニケーション技術の実際] ・感覚機能が低下している人とのコミュニケーション 8. 視覚障害の人とのコミュニケーション① 高梨 9. 視覚障害の人とのコミュニケーション② 高梨 10. 聴覚障害の人とのコミュニケーション① 福島 11. 聴覚障害の人とのコミュニケーション② 福島 12. 運動機能障害のある人とのコミュニケーション① 森山 13. 運動機能障害のある人とのコミュニケーション② 森山 14. 認知・知覚機能障害のある人とのコミュニケーション① 黒田 15. 認知・知覚機能障害のある人とのコミュニケーション② 黒田</p> <p>評価 福島</p>	<p>〔Ⅲ〕介護におけるチームのコミュニケーション 21～30 河内</p> <p>16. 知的障害のある人とのコミュニケーション① 宮田 17. 知的障害のある人とのコミュニケーション② 宮田 18. 精神障害のある人とのコミュニケーション① 宮田 19. 精神障害のある人とのコミュニケーション② 宮田 20. まとめ 宮田</p> <p>21. 記録による情報の共有化 その1 介護における記録の意義と目的 22. 記録による情報の共有化 その2 介護に関する記録の種類 23. 記録による情報の共有化 その3 介護記録の方法と留意点・記録の管理 24. 記録による情報の共有化 その4 介護記録の共有化 25. 記録による情報の共有化 その5 情報通信技術 (IT) を活用した介護記録の意義と活用の留意点・個人情報保護について 26. 記録による情報の共有化 その6 介護記録の活用 27. 報告による情報の共有化 介護における報告の意義と目的ー報告・連絡・相談の方法と留意点ー 28. 会議による情報の共有化 その1 介護における会議の意義と目的 29. 会議による情報の共有化 その2 介護における会議の種類と方法・留意点 30. まとめ</p> <p>評価 福島</p>						
<p>[準備学習] 授業は予習を前提に進めるため、事前にテキスト、その他関連図書を読んで概要をつかんでおいて下さい。 また専門用語の意味についても、できる限り調べておいて下さい。</p>							
<p>[使用テキスト・参考文献] (テキスト) 介護福祉士養成テキスト7 コミュニケーション技術 ー人間関係の形成と実践技術ー 黒澤貞夫・小熊順子編著、建帛社</p>			<p>[単位認定の方法及び基準] 1. 提出物：40% 2. 小テスト：40% 3. 授業態度(出席日数等含む)：20%</p>				

授業のタイトル (科目名) 生活支援技術 I		授業の種類 (講義・ 演習 ・実習)		授業担当者 大橋 千枝・正宗 三枝	
授業の回数 15回		時間数 (単位数) 30時間・1単位		配当年次・時期 1年次・前期	
				必修・選択 必修	
<p>【授業の目的・ねらい】 自立に向けた家事の介護を学ぶ。家事の介助に関する知識、技術を学び、利用者の個性に対応できる能力を習得する。</p> <p>【授業全体の内容の概要】 家事介助を必要とする人の生活を重視し、個性を尊重した援助を行なうために、さまざまな家事介助の技法を、演習を通じて習得していく。</p> <p>【授業終了時の達成課題 (到達目標)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「生活」、「生活形成のプロセス」、「生活経営」(マネジメント)、「生活支援の考え方」を理解する。 ・家事介助の意義及び目的を理解できる。 ・ICFの視点に基づく家事介助の必要性を理解する。 ・家事の介助の技法を習得する。 					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数</p> <p>〔I〕生活の理解と生活支援</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 生活の理解と生活支援 —生活の定義・生活形成のプロセス・生活経営について— 2. 生活支援の考え方 —ICFの視点に基づくアセスメント他— <p>〔II〕自立に向けた家事の介護</p> <ol style="list-style-type: none"> 3. 家事の意義と目的 4. 家事に関する利用者のアセスメント —家事への意欲を引き出す介護の工夫— 5. 洗濯、衣類・寝具の衛生管理 6. 掃除・ごみ捨て 7. 家計の管理・買い物 8. 調理の基本1 9. 調理の基本2 10. 加工食品の活用と保存 11. 配食サービスの利用について 12. 感覚機能が低下している人への調理の介護 13. 運動機能が低下している人への調理の介護 14. 認知・知覚機能が低下している人への調理の介護 15. まとめ <p>試験</p>					
<p>【準備学習】 (大橋) 身近にいる高齢者の生活歴を聞くこと。演習で学んだことを実生活でも活用してみてください。 (正宗) 8回目「調理の基本1」の前に、テキスト「お料理一年生」のp8～22、54～57、84～85、93～95、98、136～138、170～171、173～177、180～187を通読しておく。他のものについては、授業時に指示します。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】 テキスト：「お料理一年生」ベターホーム出版局 「生活支援技術I」中央法規 参考文献：「生活支援技術I、II」中央法規 「生活支援の家政学」建帛社 「介護職員基礎研修テキスト」 全国社会福祉協議会他</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 期末試験：60% 2. 提出物：20% 3. 実習状況(出席日数等も含む)：20% 		

授業のタイトル (科目名) 生活支援技術Ⅱ		授業の種類 (講義・ 演習 ・実習)		授業担当者 廣池 利邦	
授業の回数 15回		時間数 (単位数) 30時間・1単位		配当年次・時期 1年次・後期	
必修・選択 必修					
<p>【授業の目標・ねらい】 「尊厳の保持」「自立・自律支援」の視点から、介護を必要としている人に適切な介護技術を用いて、安全かつ潜在能力を引き出す支援技術や知識について習得することを目的とする。</p> <p>【授業全体の内容の概要】 「自立に向けた移動の介護」を重点課題とし、利用者の生活史・文化史を通して、利用者の生きてきた生活環境、社会参加、余暇活動等の支援の理論と技術を理解させる。</p> <p>【授業終了時の達成課題 (到達目標)】 利用者の心身と生活の活性化となる「移動」の意義と目的を理解した上で、利用者の尊厳を保持し、利用者と同じステージに立てるコミュニケーション能力を身につけ、利用者を理解した生活支援ができる。</p>					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「生活支援技術Ⅱ」に関するオリエンテーション 2. 高齢者の「自立」と「移動」の理解 3. 高齢者を活性化させることの理解 4. 生活の快さとは「安全で的確な移動・移乗の介助から」 5. 日常生活支援の基本はコミュニケーション・ワーク 6. 日常生活支援を支えるアクティビティ・サービス 7. アクティビティ・サービスの側面 8. アクティビティ・サービスの効果 9. 高齢者の尊厳を支える援助者の資質 10. 高齢者の権利の保障と援助者自身の気づき 11. 日常生活支援の体系と他職種との協働 12. 日常生活支援のための専門職・仕事の内容 13. 日常生活支援のための人間理解・感覚機能低下の人 14. 日常生活支援のための人間理解・運動機能低下の人 15. 日常生活支援のための人間理解・認知・知覚機能低下の人 <p>試験等</p>					
<p>【準備学習】 高齢者や障害者の生活について、気が付いたことや感じていることを記録していくこと。また、新聞やTVなどのメディアで取り上げている、高齢者や障害者の現状などの話題について、常に興味関心を持って生活すること。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】 『アクティビティ・サービス』中央法規出版</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 期末試験：60% 2. 授業態度(出席日数も含む)：20% 3. 提出物(小テストも含む)：20% 		

授業のタイトル (科目名) 生活支援技術Ⅲ		授業の種類 (講義・ 演習 ・実習)		授業担当者 嶋田美津江・山本みよ子	
授業の回数 30回		時間数 (単位数) 60時間・2単位		配当年次・時期 1年次・前期	
				必修・選択 必修	
【授業の目標・ねらい】 介護の利用者の尊厳の保持の観点から、その人にとっての自立・自律につながる潜在能力を生かした身じたくへの支援のあり方や食事の楽しみ、適切な介護によって、健康を維持し、快適な生活ができるための技術を学ぶ。					
【授業全体の内容の概要】 ①身じたくの意義や効果について理解し、事例展開による利用者の状態に応じた身じたくの技術を演習のなかで理解し、アセスメントや介護技術、他の領域の知識と連動させ、適切に提供できるようグループワークを中心に学ぶ。 ②利用者の食文化や現状へのアセスメントに基づき、自立・自律した生活への支援につながるような快適な食事介護の工夫や支援のあり方についてグループワークを中心に学ぶ。					
【授業終了時の達成課題 (到達目標)】 ①利用者の状態に応じた身じたくの介護についてアセスメントし、適切な技法を活用して支援することが出来る。 ②利用者の状態に応じた食事の介護についてアセスメントし、適切な技法を活用して支援することが出来る。					
【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数					
〔Ⅰ〕 自立に向けた身じたくの介護 1～15回 嶋田 1. 身じたくの意義と目的① 2. 身じたくの意義と目的② 3. ICFの視点にもとづく身じたくに関する利用者のアセスメント① 4. ICFの視点にもとづく身じたくに関する利用者のアセスメント② 5. 生活習慣と装いの楽しみを支える介護の工夫① 6. 生活習慣と装いの楽しみを支える介護の工夫② 7. 感覚機能が低下している人の整容や更衣、衣服の選択などの行為を支える介護の技法① 8. 感覚機能が低下している人の整容や更衣、衣服の選択などの行為を支える介護の技法② 9. 運動機能が低下している人の整容や更衣、衣服の選択などの行為を支える介護の技法① 10. 運動機能が低下している人の整容や更衣、衣服の選択などの行為を支える介護の技法② 11. 運動機能が低下している人の整容や更衣、衣服の選択などの行為を支える介護の技法③ 12. 運動機能が低下している人の整容や更衣、衣服の選択などの行為を支える介護の技法④ 13. 認知機能が低下している人の整容や更衣、衣服の選択などの行為を支える介護の技法① 14. 認知機能が低下している人の整容や更衣、衣服の選択などの行為を支える介護の技法② 15. まとめ (自立に向けた身じたくの介護) 評価・試験・レポート等					
〔Ⅱ〕 自立に向けた食事の介護 16～30回 山本 16. 食事の意義と目的 17. ICFの視点にもとづく、食事に関する利用者のアセスメント 18. おいしく食べることを支える介護の工夫 19. 安全で的確な食事介助の技法 誤嚥・窒息の予防のための留意点① 20. 安全で的確な食事介助の技法 誤嚥・窒息の予防のための留意点② 21. 安全で的確な食事介助の技法 脱水の予防のための留意点① 22. 安全で的確な食事介助の技法 脱水の予防のための留意点② 23. 安全で的確な食事介助の技法 口腔の清潔① 24. 安全で的確な食事介助の技法 口腔の清潔② 25. 感覚機能が低下している人の食事介助の留意点① 26. 感覚機能が低下している人の食事介助の留意点② 27. 運動機能が低下している人の食事介助の留意点① 28. 運動機能が低下している人の食事介助の留意点② 29. 認知機能が低下している人の食事介助の留意点① 30. まとめ (自立に向けた食事の介護) 評価・試験・レポート等 嶋田・山本					
【準備学習】 授業計画に示された内容に従って指定されたテキスト及びサブテキストの該当部分についてあらかじめ熟読しておくこと。					
【使用テキスト・参考文献】 新介護福祉士養成講座 7 生活支援技術Ⅱ 中央法規出版 著者介護福祉士養成講座編集委員会			【単位認定の方法及び基準】 1. まとめ・評価：40% 2. 授業態度：20% 3. 提出物：20% 4. 実技演習：20%		

授業のタイトル (科目名) 生活支援技術Ⅳ		授業の種類 (講義・演習・実習)		授業担当者 嶋田美津江・山本みよ子	
授業の回数 30回		時間数 (単位数) 60時間・2単位		配当年次・時期 1年次・後期	
				必修・選択 必修	
【授業の目標・ねらい】 介護の利用者の尊厳の保持の観点から、その人にとっての自立・自律につながる潜在能力を生かした移動への支援のあり方やプライバシーの保護や状況に応じた排泄への適切な介護によって、健康を維持し、快適な生活ができるための技術を学ぶ。					
【授業全体の内容の概要】 ①生活における移動の意義や目的について理解し、事例展開による利用者の状態に応じた移動の技術を演習のなかで理解し、アセスメントや介護技術、他の領域の知識と連動させ、適切に提供できるようグループワークを中心に学ぶ。 ②利用者の心身の状態へのアセスメントに基づき、自立・自律した生活への支援につながるような快適な排泄介護の工夫や支援のあり方についてグループワークを中心に学ぶ。					
【授業修了時の達成課題 (到達目標)】 ①利用者の状態に応じた移動の介護についてアセスメントし、適切な技法を活用して支援することが出来る。 ②利用者の状態に応じた排泄の介護についてアセスメントし、適切な技法を活用して支援することが出来る。					
【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数					
〔Ⅰ〕自立に向けた移動の介護 1～15回 嶋田 1. 移動の意義と目的① 2. 移動の意義と目的② 3. ICFの視点にもとづく、移動に関する利用者のアセスメント① 4. ICFの視点にもとづく、移動に関する利用者のアセスメント② 5. 安全で的確な移動・移乗の介助 座位・立位・歩行の介助① 6. 安全で的確な移動・移乗の介助 座位・立位・歩行の介助② 7. 安全で的確な移動・移乗の介助 車椅子の介助① 8. 安全で的確な移動・移乗の介助 車椅子の介助② 9. 安全で的確な移動・移乗の介助 車椅子の介助③ 10. 体位変換・安楽な体位の保持① 11. 感覚機能が低下している人の移動・移乗介助の留意点 12. 認知機能が低下している人の移動・移乗介助の留意点 13. 運動機能が低下している人の移動・移乗介助の留意点① 14. 運動機能が低下している人の移動・移乗介助の留意点② 15. まとめ (自立に向けた移動の介護) 評価・試験・レポート等					
〔Ⅱ〕自立に向けた排泄の介護 16～30回 山本 16. 排泄の意義と目的 17. ICFの視点にもとづく、排泄に関する利用者のアセスメント① 18. ICFの視点にもとづく、排泄に関する利用者のアセスメント② 19. 気持ちよい排泄を支える介護の工夫 20. 安全で的確な排泄介助の技法 便秘・下痢の予防と介護の留意点 21. 安全で的確な排泄介助の技法 頻尿の人への介護の留意点 22. 感覚機能が低下している人の排泄介助の留意点 トイレ介助・ポータブルトイレ介助 23. 運動機能が低下している人の排泄介助の留意点 採尿器・差込便器の介助 24. 運動機能が低下している人の排泄介助の留意点 車椅子トイレ介助 25. 運動機能が低下している人の排泄介助の留意点 失禁時の介助 26. 運動機能が低下している人の排泄介助の留意点 オムツ介助 27. 認知機能が低下している人の排泄介助の留意点 失禁時の介助 28. 認知機能が低下している人の排泄介助の留意点 トイレ誘導 29. 認知機能が低下している人の排泄介助の留意点 おむつ介助 30. まとめ (自立に向けた排泄の介護) 評価・試験・レポート等					
【準備学習】 授業計画に示された内容に従って指定されたテキスト及びサブテキストの該当部分についてあらかじめ熟読しておくこと。					
【使用テキスト・参考文献】 新・介護福祉士養成講座 7 生活支援技術Ⅱ 中央法規出版			【単位認定の方法及び基準】 1. まとめ・評価：40% 2. 授業態度：20% 3. 提出物：20% 4. 実技演習：20%		

授業のタイトル (科目名) 生活支援技術Ⅴ		授業の種類 (講義・ 演習 ・実習)		授業担当者 平澤 泰子・加藤英池子	
授業の回数 30回		時間数 (単位数) 60時間・2単位		配当年次・時期 2年次・前期	
				必修・選択 必修	
【授業の目標・ねらい】 介護の利用者への尊厳の保持の観点から、その人にとっての入浴の楽しみや、保清による快適な生活支援を学ぶ。利用者 ^① の生活文化や現状を理解し、居住環境の工夫や整備により自立、自律を目指した介護のあり方や技法を学ぶ。					
【授業全体の内容の概要】 ①入浴の意義や効果について理解し、事例展開による利用者の状態に応じた入浴や保清の技術を演習のなかで理解し、アセスメントや介護技術、他の領域の知識と連動させ、適切に提供できるようグループワークを中心に学ぶ。 ②利用者の生活史や価値観、現状のアセスメントに基づき、自立・自律した生活への支援につながるような快適な生活環境整備への工夫と支援のあり方についてグループワークを中心に学ぶ。					
【授業終了時の達成課題 (到達目標)】 ①利用者の状態に応じた入浴・保清の介護についてアセスメントし、適切な技法を活用して支援することが出来る。 ②利用者の自立支援のための住環境の整備への理解と適切な支援方法についてアセスメントに基づき計画作成できる。					
【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数 【Ⅰ】自立に向けた入浴・清潔保持の介護 1. 入浴の意義と目的① 2. 入浴の意義と目的② 3. ICFの視点にもとづく、入浴に関する利用者のアセスメント① 4. ICFの視点にもとづく、入浴に関する利用者のアセスメント② 5. 入浴を楽しむ環境の工夫 6. 爽快感をもたらし、安楽に入浴するための介護の工夫 7. 安全・的確な入浴・清潔保持の介助の技法 入浴・シャワー浴・洗髪① 8. 安全・的確な入浴・清潔保持の介助の技法 入浴・シャワー浴・洗髪② 9. 安全・的確な入浴・清潔保持の介助の技法 全身清拭・陰部洗浄・足浴・手浴① 10. 安全・的確な入浴・清潔保持の介助の技法 全身清拭・陰部洗浄・足浴・手浴② 11. 感覚機能が低下している人の入浴介助の留意点① 12. 感覚機能が低下している人の入浴介助の留意点② 13. 運動機能が低下している人の入浴介助の留意点① 14. 運動機能が低下している人の入浴介助の留意点② 15. 認知機能が低下している人の入浴介助の留意点 16. まとめ (自立に向けた入浴・清潔保持の介護) 評価・試験・レポート等 【Ⅱ】自立に向けた居住環境の整備 17. 居住環境整備の意義と目的① 18. 居住環境整備の意義と目的② 19. 生活空間と介護 利用者の生活の歴史や文化を尊重した住まいと生活の場への理解① 20. 生活空間と介護 利用者の生活の歴史や文化を尊重した住まいと生活の場への理解② 21. 居住環境のアセスメント ICFの視点に基づく利用者の生活全体へのアセスメント① 22. 居住環境のアセスメント ICFの視点に基づく利用者の生活全体へのアセスメント② 23. 安全で心地よい生活の場づくり 安全で心地よい生活の場づくりの工夫① 24. 安全で心地よい生活の場づくり 安全で心地よい生活の場づくりの工夫② 25. 安全で心地よい生活の場づくり 住宅改修 26. 安全で心地よい生活の場づくり バリアフリー化・ユニバーサルデザインなどの活用① 27. 安全で心地よい生活の場づくり バリアフリー化・ユニバーサルデザインなどの活用② 28. 集合で暮らす場合の居住環境について 施設で暮らす場合の居住環境への理解と工夫① 29. 集合で暮らす場合の居住環境について 施設で暮らす場合の居住環境への理解と工夫② 30. まとめ (自立に向けた居住環境の整備) 評価・試験・レポート等					
【準備学習】 教科書で予習をしてすることが必要である。また、自分の日常生活の中で、入浴や清潔保持をどのように行っているか、生活の場である住環境について考え、実習Ⅰで経験した施設での利用者 ^① の入浴や清潔保持、住環境との違いについて考えてくることが望ましい。					
【使用テキスト・参考文献】 新・介護福祉士養成講座 7 生活支援技術Ⅱ 中央法規出版			【単位認定の方法及び基準】 1. まとめ・評価：40% 2. 授業態度(出席日数等も含む)：20% 3. 提出物：20% 4. 実技演習：20%		

授業のタイトル (科目名) 生活支援技術 VI		授業の種類 (講義・ 演習 ・実習)		授業担当者 城 正子			
授業の回数 30回		時間数 (単位数) 60時間・2単位		配当年次・時期 2年次・後期			
				必修・選択 必修			
<p>【授業の目標・ねらい】 睡眠・終末期の介護について、介護福祉士の役割を果たせる力量をつけるために、介護理念、知識、技術を鍛え、個々の利用者特有の睡眠・終末期の状況アセスメント、ケアプラン、実践へと応用できる力を身につける。</p> <p>【授業全体の内容の概要】 【睡眠の介護】 人間として当たり前である安楽な睡眠の願いが果たされない高齢者や障害者の生理、心理を十分に理解し環境整備を学び、利用者の心身状況や個性に応じた臨機応変な安眠のための介護の力を養う。 【終末期の介護】 日常的に死のニュースは氾濫しているが、「死」を自分のこととしてとらえにくい現実がある。いきなり「死とは何か」と言われても、とまどってしまうかもしれない。まずは、「喪失体験を分かち合う」というテーマで、個々の感受性を掘り起こす。次に、終末期の意義を考え合い、あなたの死生観を鍛える。そして、終末期の理解に立ち、QOLを高める身体・生活援助やコミュニケーション技術を身につける。チームアプローチの中で介護福祉士の役割を自覚し、援助と連携できる力を養う。真剣な討論参加、介護技術の熟達を中心に進める。</p> <p>【授業修了時の達成課題 (到達目標)】 ①睡眠の重要性とリズム、高齢者の特徴を理解し、利用者の疾病、習慣、希望から睡眠行動のアセスメントができる。 ②個別アセスメントをもとに、環境づくり、不眠対策、安全、安楽な体位等を、工夫できる。 ③延命治療、緩和ケア、リビングウィル等、尊厳の保持とは何かを学び、自分自身の死生観を深めることができる。 ④終末期の心身状況を理解、QOLを高める身体・生活援助と、共感、呼応する対話で精神的サポートができる。 ⑤在宅・施設ターミナルケアでの多職種の連携、臨終時の介護技術、グリーフケア等介護福祉士の役割を理解する。</p>							
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数</p> <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> <p>〔Ⅰ〕 自立に向けた睡眠の介護</p> <p style="text-align: center;">1～15回 睡眠の意義と目的</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ICFの視点にもとづく睡眠に関する利用者のアセスメント① 2. ICFの視点にもとづく睡眠に関する利用者のアセスメント② 3. 安眠のための介護① 4. 安眠のための介護② 5. 安眠のための介護③ 6. 感覚機能が低下している人の介護の留意点① 7. 感覚機能が低下している人の介護の留意点② 8. 運動機能が低下している人の介護の留意点① 9. 運動機能が低下している人の介護の留意点② 10. 認知機能が低下している人の介護の留意点① 11. 認知機能が低下している人の介護の留意点② 12. 不眠時の対応 (他の職種の役割と協働) ① 13. 不眠時の対応 (他の職種の役割と協働) ② 14. 不眠時の対応 (他の職種の役割と協働) ③ 15. まとめ </td> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> <p>〔Ⅱ〕 終末期の介護</p> <p style="text-align: center;">16～30回 終末期の介護の基本</p> <ol style="list-style-type: none"> 16. ICFの視点にもとづく終末期に関する利用者のアセスメント① 17. ICFの視点にもとづく終末期に関する利用者のアセスメント② 18. 医療との連携(多職種の役割と協働・看取りのための制度)① 19. 医療との連携(多職種の役割と協働・看取りのための制度)② 20. 医療との連携(多職種の役割と協働・看取りのための制度)③ 21. 終末期における介護① 22. 終末期における介護② 23. 終末期における介護③ 24. 臨終時の介護① 25. 臨終時の介護② 26. 在宅施設における終末期の介護 27. 在宅施設における終末期の介護 28. グリーフケア① 29. グリーフケア② 30. まとめ <p style="text-align: center;">試験・レポート等</p> </td> </tr> </table>						<p>〔Ⅰ〕 自立に向けた睡眠の介護</p> <p style="text-align: center;">1～15回 睡眠の意義と目的</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ICFの視点にもとづく睡眠に関する利用者のアセスメント① 2. ICFの視点にもとづく睡眠に関する利用者のアセスメント② 3. 安眠のための介護① 4. 安眠のための介護② 5. 安眠のための介護③ 6. 感覚機能が低下している人の介護の留意点① 7. 感覚機能が低下している人の介護の留意点② 8. 運動機能が低下している人の介護の留意点① 9. 運動機能が低下している人の介護の留意点② 10. 認知機能が低下している人の介護の留意点① 11. 認知機能が低下している人の介護の留意点② 12. 不眠時の対応 (他の職種の役割と協働) ① 13. 不眠時の対応 (他の職種の役割と協働) ② 14. 不眠時の対応 (他の職種の役割と協働) ③ 15. まとめ 	<p>〔Ⅱ〕 終末期の介護</p> <p style="text-align: center;">16～30回 終末期の介護の基本</p> <ol style="list-style-type: none"> 16. ICFの視点にもとづく終末期に関する利用者のアセスメント① 17. ICFの視点にもとづく終末期に関する利用者のアセスメント② 18. 医療との連携(多職種の役割と協働・看取りのための制度)① 19. 医療との連携(多職種の役割と協働・看取りのための制度)② 20. 医療との連携(多職種の役割と協働・看取りのための制度)③ 21. 終末期における介護① 22. 終末期における介護② 23. 終末期における介護③ 24. 臨終時の介護① 25. 臨終時の介護② 26. 在宅施設における終末期の介護 27. 在宅施設における終末期の介護 28. グリーフケア① 29. グリーフケア② 30. まとめ <p style="text-align: center;">試験・レポート等</p>
<p>〔Ⅰ〕 自立に向けた睡眠の介護</p> <p style="text-align: center;">1～15回 睡眠の意義と目的</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ICFの視点にもとづく睡眠に関する利用者のアセスメント① 2. ICFの視点にもとづく睡眠に関する利用者のアセスメント② 3. 安眠のための介護① 4. 安眠のための介護② 5. 安眠のための介護③ 6. 感覚機能が低下している人の介護の留意点① 7. 感覚機能が低下している人の介護の留意点② 8. 運動機能が低下している人の介護の留意点① 9. 運動機能が低下している人の介護の留意点② 10. 認知機能が低下している人の介護の留意点① 11. 認知機能が低下している人の介護の留意点② 12. 不眠時の対応 (他の職種の役割と協働) ① 13. 不眠時の対応 (他の職種の役割と協働) ② 14. 不眠時の対応 (他の職種の役割と協働) ③ 15. まとめ 	<p>〔Ⅱ〕 終末期の介護</p> <p style="text-align: center;">16～30回 終末期の介護の基本</p> <ol style="list-style-type: none"> 16. ICFの視点にもとづく終末期に関する利用者のアセスメント① 17. ICFの視点にもとづく終末期に関する利用者のアセスメント② 18. 医療との連携(多職種の役割と協働・看取りのための制度)① 19. 医療との連携(多職種の役割と協働・看取りのための制度)② 20. 医療との連携(多職種の役割と協働・看取りのための制度)③ 21. 終末期における介護① 22. 終末期における介護② 23. 終末期における介護③ 24. 臨終時の介護① 25. 臨終時の介護② 26. 在宅施設における終末期の介護 27. 在宅施設における終末期の介護 28. グリーフケア① 29. グリーフケア② 30. まとめ <p style="text-align: center;">試験・レポート等</p>						
<p>【準備学習】 既習科目「こころとからだのしくみⅡ」の振りかえりをする。</p>							
<p>【使用テキスト・参考文献】 生活支援技術Ⅱ (中央法規)</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】 (試験やレポートの評価基準など)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 授業態度：20% 2. 課題提出：30% 3. 期末試験：50% 				

授業のタイトル (科目名) 介護過程 I (意義と展開)		授業の種類 (講義)・演習・実習		授業担当者 福島 猛行	
授業の回数 15回	時間数 (単位数) 30時間・2単位	配当年次・時期 1年次・後期		必修・選択 必修	
<p>【授業の目標・ねらい】 介護サービスの提供を受ける人・場によらずあらゆる介護場面に活用できるように生活支援行為の本質に即した目標志向的なアプローチによる介護の方法を学ぶ。</p> <p>【授業全体の内容の概要】 一人ひとりの利用者の事例をとおして利用者とのコミュニケーションから介護実践まで及び実践後の振り返りのプロセスを検討することで一人ひとりの利用者の生活を統合して理解し、介護実践に生かす考え方を学ぶ。</p> <p>【授業終了時の達成課題 (到達目標)】 介護の展開がサイエンスとヒューマンティのプロセスであることを理解できる。</p>					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 介護過程の意義 2. 介護過程の目的 3. 介護が社会的に制度化するために必要なサイエンスとヒューマンティ 4. 介護概念と介護過程の関係 5. 介護過程の展開 (事例をとおしてイメージ) 6. 介護過程の前提としてのニーズを見る視点 7. 相談から始まり相談に終わる介護過程 8. アセスメントの仕組み ①アセスメントとは何か 9. アセスメントの仕組み ②アセスメントの方法 10. ICFの介護過程への活用 11. 介護計画の立案 ①介護計画の仕組み 12. 介護計画の立案 ②介護の理念価値をめざす介護計画の実践価値 13. 介護過程の実施の意義と実施時の留意点 14. 介護過程の評価と修正 ①評価の意義と評価の手順 ②評価の記録の書き方 15. 介護過程とチームアプローチ <p>まとめと評価</p>					
<p>【準備学習】 前回の授業をふまえテキストに基づき、毎時事前学習をすること。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】 介護過程の展開 (建帛社)</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】 試験及び出席状況により総合的に評価する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 期末テスト：60% 2. 提出物：20% 3. 授業態度(出席日数を含む)：20% 		

授業のタイトル (科目名) 介護過程Ⅱ (実践的展開)		授業の種類 (講義・ 演習 ・実習)		授業担当者 嶋田美津江・山本みよ子			
授業の回数 30回		時間数 (単位数) 60時間・2単位		配当年次・時期 2年次・通年			
				必修・選択 必修			
<p>【授業の目標・ねらい】 介護過程の意義や展開の思考過程の学習を基礎とし、実際の生活場面での利用者の状況に応じた適切な介護の提供が出来るよう、他の科目で学習した知識・技術を統合し、介護過程を展開、介護計画の作成が出来るようにする。</p> <p>【授業全体の内容の概要】 複数の障害形態や、加齢による心身機能低下からの介護の必要性のある事例に基づき授業を展開、実習の学びや現場の臨床例なども交え、実践力を養えるよう、視覚教材、ワークシートの作成やグループワークなどによる授業展開。</p> <p>【授業修了時の達成課題 (到達目標)】 介護過程の展開、介護計画作成において、自立支援の理念に基づき、利用者の意思や主体性を尊重した適切な介護の提供が出来る。</p>							
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数</p> <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> <p>介護過程の実践的展開 1～30回：嶋田・山本</p> <p>〔Ⅰ〕 加齢による心身機能の低下があり、在宅で独居で暮らしている人への介護過程の展開と介護計画作成</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 1 事例の理解 (信頼関係の形成) 2. 2 アセスメント (情報の収集・解釈・分析) 3. 3 ケースカンファレンス 4. 4 介護過程とケアプラン (居宅介護サービス計画) 5. 5 実施・記録 (ロールプレイ) 6. 6 評価 (サービス担当者会議:ロールプレイ) 7. 7 まとめ (グループワーク・発表) <p>〔Ⅱ〕 在宅で暮らしている運動機能障害のある高齢者世帯の利用者への介護過程の展開と介護計画作成</p> <ol style="list-style-type: none"> 8. 1 事例の理解 (信頼関係の形成) 9. 2 アセスメント (情報の収集・解釈・分析) 10. 3 ケースカンファレンス 11. 4 介護過程とケアプラン (居宅介護サービス計画) 12. 5 実施・記録 (ロールプレイ) 13. 6 評価 (サービス担当者会議:ロールプレイ) 14. 7 まとめ (グループワーク・発表) 15. まとめ (〔Ⅰ〕の事例、〔Ⅱ〕の事例) <p>中間評価・試験、レポート等</p> </td> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> <p>〔Ⅲ〕 施設で暮らす認知症高齢者への介護過程の展開と介護計画作成</p> <ol style="list-style-type: none"> 16. 1 事例の理解 (信頼関係の形成) 17. 2 アセスメント (情報の収集・解釈・分析) 18. 3 ケースカンファレンス 19. 4 介護過程とケアプラン (居宅介護サービス計画) 20. 5 実施・記録 (ロールプレイ) 21. 6 評価 (サービス担当者会議:ロールプレイ) 22. 7 まとめ (グループワーク・発表) <p>〔Ⅳ〕 保健・医療との連携の必要性のある人への介護過程の展開と介護計画作成</p> <ol style="list-style-type: none"> 23. 1 事例の理解 (信頼関係の形成) 24. 2 アセスメント (情報の収集・解釈・分析) 25. 3 ケースカンファレンス 26. 4 介護過程とケアプラン (施設介護サービス計画) 27. 5 実施・記録 (ロールプレイ) 28. 6 評価 (サービス担当者会議:ロールプレイ) 29. 7 まとめ (グループワーク・発表) 30. まとめ (〔Ⅲ〕の事例、〔Ⅳ〕の事例) <p>総合評価・試験、レポート等</p> </td> </tr> </table>						<p>介護過程の実践的展開 1～30回：嶋田・山本</p> <p>〔Ⅰ〕 加齢による心身機能の低下があり、在宅で独居で暮らしている人への介護過程の展開と介護計画作成</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 1 事例の理解 (信頼関係の形成) 2. 2 アセスメント (情報の収集・解釈・分析) 3. 3 ケースカンファレンス 4. 4 介護過程とケアプラン (居宅介護サービス計画) 5. 5 実施・記録 (ロールプレイ) 6. 6 評価 (サービス担当者会議:ロールプレイ) 7. 7 まとめ (グループワーク・発表) <p>〔Ⅱ〕 在宅で暮らしている運動機能障害のある高齢者世帯の利用者への介護過程の展開と介護計画作成</p> <ol style="list-style-type: none"> 8. 1 事例の理解 (信頼関係の形成) 9. 2 アセスメント (情報の収集・解釈・分析) 10. 3 ケースカンファレンス 11. 4 介護過程とケアプラン (居宅介護サービス計画) 12. 5 実施・記録 (ロールプレイ) 13. 6 評価 (サービス担当者会議:ロールプレイ) 14. 7 まとめ (グループワーク・発表) 15. まとめ (〔Ⅰ〕の事例、〔Ⅱ〕の事例) <p>中間評価・試験、レポート等</p>	<p>〔Ⅲ〕 施設で暮らす認知症高齢者への介護過程の展開と介護計画作成</p> <ol style="list-style-type: none"> 16. 1 事例の理解 (信頼関係の形成) 17. 2 アセスメント (情報の収集・解釈・分析) 18. 3 ケースカンファレンス 19. 4 介護過程とケアプラン (居宅介護サービス計画) 20. 5 実施・記録 (ロールプレイ) 21. 6 評価 (サービス担当者会議:ロールプレイ) 22. 7 まとめ (グループワーク・発表) <p>〔Ⅳ〕 保健・医療との連携の必要性のある人への介護過程の展開と介護計画作成</p> <ol style="list-style-type: none"> 23. 1 事例の理解 (信頼関係の形成) 24. 2 アセスメント (情報の収集・解釈・分析) 25. 3 ケースカンファレンス 26. 4 介護過程とケアプラン (施設介護サービス計画) 27. 5 実施・記録 (ロールプレイ) 28. 6 評価 (サービス担当者会議:ロールプレイ) 29. 7 まとめ (グループワーク・発表) 30. まとめ (〔Ⅲ〕の事例、〔Ⅳ〕の事例) <p>総合評価・試験、レポート等</p>
<p>介護過程の実践的展開 1～30回：嶋田・山本</p> <p>〔Ⅰ〕 加齢による心身機能の低下があり、在宅で独居で暮らしている人への介護過程の展開と介護計画作成</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 1 事例の理解 (信頼関係の形成) 2. 2 アセスメント (情報の収集・解釈・分析) 3. 3 ケースカンファレンス 4. 4 介護過程とケアプラン (居宅介護サービス計画) 5. 5 実施・記録 (ロールプレイ) 6. 6 評価 (サービス担当者会議:ロールプレイ) 7. 7 まとめ (グループワーク・発表) <p>〔Ⅱ〕 在宅で暮らしている運動機能障害のある高齢者世帯の利用者への介護過程の展開と介護計画作成</p> <ol style="list-style-type: none"> 8. 1 事例の理解 (信頼関係の形成) 9. 2 アセスメント (情報の収集・解釈・分析) 10. 3 ケースカンファレンス 11. 4 介護過程とケアプラン (居宅介護サービス計画) 12. 5 実施・記録 (ロールプレイ) 13. 6 評価 (サービス担当者会議:ロールプレイ) 14. 7 まとめ (グループワーク・発表) 15. まとめ (〔Ⅰ〕の事例、〔Ⅱ〕の事例) <p>中間評価・試験、レポート等</p>	<p>〔Ⅲ〕 施設で暮らす認知症高齢者への介護過程の展開と介護計画作成</p> <ol style="list-style-type: none"> 16. 1 事例の理解 (信頼関係の形成) 17. 2 アセスメント (情報の収集・解釈・分析) 18. 3 ケースカンファレンス 19. 4 介護過程とケアプラン (居宅介護サービス計画) 20. 5 実施・記録 (ロールプレイ) 21. 6 評価 (サービス担当者会議:ロールプレイ) 22. 7 まとめ (グループワーク・発表) <p>〔Ⅳ〕 保健・医療との連携の必要性のある人への介護過程の展開と介護計画作成</p> <ol style="list-style-type: none"> 23. 1 事例の理解 (信頼関係の形成) 24. 2 アセスメント (情報の収集・解釈・分析) 25. 3 ケースカンファレンス 26. 4 介護過程とケアプラン (施設介護サービス計画) 27. 5 実施・記録 (ロールプレイ) 28. 6 評価 (サービス担当者会議:ロールプレイ) 29. 7 まとめ (グループワーク・発表) 30. まとめ (〔Ⅲ〕の事例、〔Ⅳ〕の事例) <p>総合評価・試験、レポート等</p>						
<p>【準備学習】 指定されたテキストの該当部分及び提示された事例をあらかじめ熟読しておくこと。</p>							
<p>【使用テキスト・参考文献】 介護福祉士養成テキスト12 「介護過程の展開 基礎的理解と実践演習」 編集者：黒澤貞男・峯尾武巳 出版社：建帛社</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】 試験やレポートの評価など</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 提出物：40% 2. まとめ・評価：40% 3. 授業態度：20% 				

授業のタイトル(科目名) 介護過程Ⅲ(居宅)		授業の種類 (講義・ 演習 ・実習)		授業担当者 織田つや子	
授業の回数 15回	時間数(単位数) 30時間・1単位	配当年次・時期 2年次・後期		必修・選択 必修	
<p>【授業の目標・ねらい】 他の科目で学習した知識や技術を統合して、介護過程を展開し、介護計画を立案し、適切なサービスの提供ができる能力を養う学習とする。</p> <p>【授業全体の内容の概要】 利用者が住みなれた地域で、暮らし続けることができるように、利用者の思いを大切にした介護過程を展開するための、在宅介護の知識と介護計画作成の方法を学ぶ。</p> <p>【授業終了時の達成課題(到達目標)】 在宅分野における介護計画を作成、実施、評価することができる。</p>					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数 在宅利用者への介護過程とチームアプローチ</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 在宅介護の意義 2. 在宅介護の概念 3. 在宅介護の実際 4. 在宅サービスの種類 5. 介護過程とケアプラン(居宅サービス計画) 6. 介護計画の作成、実施、評価 7. 介護計画 ①情報収集 8. 介護計画 ②計画の作成1 9. 介護計画 ③計画の作成2 10. 介護計画 ④計画の実施 11. 介護計画 ⑤計画の評価 12. ケースカンファレンス 13. サービス担当者会議 14. 他職種との連携 15. まとめ <p>評価・レポート</p>					
<p>【準備学習】 (授業への心構え) この授業は演習なので、毎回提出物があります。また、介護計画の作成から評価までの6～11回目の授業は、一つの事例を段階を追って演習します。欠席しないように、体調管理に十分気をつけて授業に臨んで下さい。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】 (参考文献) 介護福祉士養成テキスト12巻『介護過程の展開』 建帛社 新・介護福祉士養成講座9巻『介護過程』中央法規 朝倉美江『在宅介護支援の今日と明日』一橋出版</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】 授業態度・演習・レポートでの総合評価</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 演習(提出物):60% 2. 演習(テスト):15% 3. レポート:15% 4. 授業態度:10% 		

授業のタイトル (科目名) 介護過程Ⅳ(施設)		授業の種類 (講義・ 演習 ・実習)		授業担当者 平澤 泰子	
授業の回数 15回		時間数 (単位数) 30時間・1単位		配当年次・時期 2年次・後期	
				必修・選択 必修	
<p>【授業の目標・ねらい】 基本的な介護の知識、技術を踏まえた上で施設利用者への自立に向けた適切な生活支援を行うための介護過程の展開方法を学ぶ。</p> <p>【授業全体の内容の概要】 施設利用者の事例を用いて介護過程に沿った施設介護サービス計画作成、チームアプローチに必要なケースカンファレンス、サービス担当者会議のもち方、進め方などの具体的な方法を演習する。</p> <p>【授業終了時の達成課題 (到達目標)】 施設利用者の個別的な介護過程の展開ができるようになると共にケアプランに基づいたサービスの流れにおける他の職種間とのチームケアを適切に行うための能力を習得する。</p>					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数 施設利用者への介護過程とチームアプローチ [Ⅰ] 特別養護老人ホームの利用者への介護過程とチームアプローチ 1. 1 事例の理解 2. 2 ケースカンファレンス 3. 3 サービス担当者会議 4. 4 介護過程とケアプラン (施設介護サービス計画) 5. 5 他の職種との連携 [Ⅱ] 老人保健施設の利用者への介護過程とチームアプローチ 6. 1 事例の理解 7. 2 ケースカンファレンス 8. 3 サービス担当者会議 9. 4 介護過程とケアプラン (施設介護サービス計画) 10. 5 他の職種との連携 [Ⅲ] グループホームの利用者への介護過程とチームアプローチ 11. 1 事例の理解 12. 2 ケースカンファレンスと他の職種との連携 13. 3 サービス担当者会議 14. 4 介護過程とケアプラン (施設介護サービス計画) 15. まとめ 試験</p>					
<p>【準備学習】 1年次後期から連続して学んでいくものであり、教科書で予習をしてもらうことは勿論必要であるが、介護過程Ⅰ(意義と展開)・Ⅱ(実践的展開)・Ⅲ(居宅)を繰り返し復習しておくことが望ましい。つまり、介護過程の意義や展開方法をしっかり身につけた上で、施設における介護展開の特性を学ぶことが望ましい。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】 「介護福祉士養成テキスト」建帛社 (介護過程の展開)</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】 1. 提出物：40% 2. まとめ・評価：40% 3. 授業態度(出席日数等も含む)：20%</p>		

授業のタイトル (科目名) 介護総合演習 I		授業の種類 (講義・演習・実習)		授業担当者 福島猛行・加藤英池子・平澤泰子・ 嶋田美津江・山本みよ子・高木剛・ 岡田圭祐・鹿野しづか・井内由美子	
授業の回数 30回	時間数 (単位数) 60時間・2単位	配当年次・時期 1年次・通年	必修・選択 必修		
【授業の目標・ねらい】 ・学内の授業と実習の連携を踏まえ、実習への動機づけを図る。介護実習 I～IVの体系を理解し、実習目標を設定し、実習終了後には個別の課題を整理し次の実習への準備を行う。					
【授業全体の内容の概要】 ・体験見学を通し、実習施設と実習に対する動機付けをする。介護実習 I の事前学習として、実習関連書類の把握や記入の仕方、目標の設定を行い、実習後には実習を振り返り個別の課題を整理する。事例を活用しケアプランを立案できる能力を養い、介護実習 II に備える。					
【授業修了時の達成課題 (到達目標)】 ・実習施設の体系、種類を理解する。実習に関わる書類の記入の仕方を学び、実習への動機付けすることができる。 ・実習の目標を設定することができ、実習後には個別課題の整理をすることができる。 ・事例を理解し、個別支援計画を立案することができる。					
【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数 1. 介護実習とは、実習の意義と目的 2. 介護実習と教科学習との関連について 3. 本学の介護実習の概要の理解 4. 介護実習と介護実習指導との関連の理解 (学習グループの編成) 5. 体験見学に向けて施設の概要等の事前学習 6. 体験見学① 7. 体験見学② 8. 体験見学レポート指導 (レポート、報告文書の書き方等) 9. 体験見学報告会 10. 介護実習 I 事前学習① (2年生の実習体験から学ぶ) 11. 介護実習 I 事前学習② (介護実習 I のコミュニケーション技法の復習) 12. 介護実習 I 事前学習③ (介護実習 I の介護技術の復習) 13. 介護実習 I 事前学習④ (個別目標の設定) 14. 実習関連書類の理解 記録の意義、重要性の理解 15. 介護実習 I 関連記録の模擬記入 評価 16. 介護実習 I 終了後の指導、報告と振り返り 17. 介護実習 I 報告会 18. 介護実習 II、介護実習 IV の体験から学ぶ (グループで2年生ケアプラン発表会) 19. 介護実習 I 報告書作成の指導 20. 報告書完成に向けた個別指導 21. グループ毎の介護実習 I 報告書発表 22. 介護実習 II における個別援助計画立案過程の理解 23. 介護実習 II の関連記録書類の理解と模擬記入 24. アセスメントの方法と留意点の理解 25. 事例分析と個別援助計画の作成① 26. 事例分析と個別援助計画の作成② 27. 介護実習 II の心構えと諸注意 28. 介護実習 III の実習施設の理解 29. 介護実習 IV の実習施設の理解 30. 2年生介護福祉実践研究レポート発表会への出席 評価					
【準備学習】 実習の手引き及び指定されたテキストの該当部分を熟読しておくこと。					
【使用テキスト・参考文献】 「介護福祉実習の手引き」 「介護実習指導」健帛社			【単位認定の方法及び基準】 出席状況、介護実習の記録、見学体験レポート、 介護実習 I 報告書を総合的に判断する。 1. 提出物：60% 2. 授業態度：40%		

授業のタイトル (科目名) 介護総合演習Ⅱ		授業の種類 (講義・演習・実習)		授業担当者 福島猛行・加藤英池子・平澤泰子・ 嶋田美津江・山本みよ子・高木剛・ 岡田圭祐・鹿野しづか・井内由美子			
授業の回数 30回		時間数 (単位数) 60時間・2単位		配当年次・時期 2年次・通年		必修・選択 必修	
【授業の目標・ねらい】 介護実習Ⅱ～Ⅳを行うための事前指導、実習終了後のまとめを行い、各自の課題を整理する。また、1年生に対し実習で体験したことを伝える機会を設け、自身の体験を様々な場面で伝える能力を備える。介護福祉実践研究レポートを作成し、介護実習と教科学習のまとめを行う。							
【授業全体の内容の概要】 ・学内の授業と介護実習で得た知識や技術を総合し、介護過程が展開できる能力を備えるように個別の支援を行う。グループでの発表や1年生に対する発表を通じ、個々人の体験を多様な場面で伝える能力を養う。介護福祉実践研究レポートのテーマ設定、作成等の個別指導を行う。							
【授業終了時の達成課題 (到達目標)】 ・体験した介護実習を生かし、介護福祉実践研究レポートの作成をし、発表する。							
【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数 1. 介護実習Ⅱ 事前学習① (実習目標の設定) 2. 介護実習Ⅱ 事前学習② (介護技術の復習) 3. 介護実習Ⅱ 事前学習③ (コミュニケーション技法の復習) 4. 介護計画作成① (テーマ設定) 5. 介護計画作成② (受け持ち利用者の決定) 6. 介護実習で何を学ぶのか 1年生に実習体験を伝える① (発表準備) 7. 介護実習で何を学ぶのか 1年生に実習体験を伝える② (発表) 8. 介護計画作成③ (アセスメントについて) 9. 介護実習Ⅲ 事前学習① (実習施設オリエンテーション) 10. 介護実習Ⅲ 事前学習② (目標の設定 実習記録オリエンテーション) 11. 介護計画作成④ (支援内容の検討) 12. 介護実習Ⅳ 事前学習① (実習施設オリエンテーション) 13. 介護実習Ⅳ 事前学習② (実習目標の設定) 14. 介護実習Ⅱ 終了後の指導、報告と振り返り 15. 介護実習Ⅱ 介護計画発表会 実習のまとめ・評価 16. 介護実習Ⅲ 報告会 17. 介護実習Ⅳ 終了後の指導、報告と振り返り 18. 介護実習Ⅱ、Ⅳで取り組む介護計画とはどのようなものか (グループで1年生に対し介護計画を発表) 19. 介護実習Ⅰ～Ⅳを通じて何を学んだか (グループ討論) 20. 専門職として、介護福祉士には何が必要なのか (グループ討論) 21. 介護実習Ⅰ～Ⅳから、各自の体験を整理し、個別課題の整理 22. 介護福祉実践レポート作成① (テーマ設定) 23. 介護福祉実践レポート作成② (文献検索の仕方、文献引用のルール) 24. 介護福祉実践レポート作成③ (レポート作成ガイダンス) 25. 介護福祉実践レポート中間発表会 26. 介護福祉実践レポート作成④ 27. 介護福祉実践レポート発表会にむけガイダンス 28. 介護福祉実践レポート発表会 29. 介護実習まとめ① (専門職として求められる技術・知識・価値：介護技術) 30. 介護実習まとめ② (専門職として求められる技術・知識・価値：コミュニケーション技法) 評価							
【準備学習】 実習の手引き及び指定されたテキストの該当部分を熟読しておくこと。							
【使用テキスト・参考文献】 「介護実習の手引き」 「介護実習指導」				【単位認定の方法及び基準】 出席状況、介護実習の記録を総合的に判断する。 1. 提出物：60% 2. 授業態度：40%			

授業のタイトル (科目名) 介護実習 I		授業の種類 (講義・演習・(実習))		授業担当者 福島猛行・加藤英池子・平澤泰子・ 嶋田美津江・山本みよ子・高木剛・ 岡田圭祐・鹿野しづか・井内由美子	
授業の回数 集中	時間数 (単位数) 90時間・2単位	配当年次・時期 1年次・前期	必修・選択 必修		
<p>[授業の目標・ねらい]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特別養護老人ホーム、老人保健施設の概要と利用者の生活を理解する。 ・コミュニケーションを通して人間的触れ合いをもち、基礎的介護の実践をする。 <p>[授業全体の内容の概要]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・利用者の生活を理解する。 ・心身機能の状態を理解し基礎的介護を実践する。 ・介護従事者の業務内容や役割を理解する。 <p>[授業修了時の達成課題 (到達目標)]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特別養護老人ホームの施設の概要や利用者の生活について理解できる。 ・コミュニケーションを通して利用者との人間的触れ合いがもてる。 ・利用者の心身機能の状態を理解し、基礎的介護の実践ができる。 					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <p>1. 施設生活の理解</p> <ol style="list-style-type: none"> ①オリエンテーションを受ける ②一日のスケジュールを体験する ③各スケジュールの持つ意義と目的について話を聞く ④介護従事者の役割を見聞きする <p>2. 利用者の心身機能の状態を理解する</p> <ol style="list-style-type: none"> ①加齢や疾病の後遺症などによる心身機能の状態に応じた生活支援技術を学び、一部実践する ②コミュニケーションを通して社会的マナー、倫理、眼差しなどの基礎的知識や技術を学ぶ <p>3. 介護関係の構築</p> <ol style="list-style-type: none"> ①利用者や介護従事者への言葉かけの重要性を実際の場面から学び、実践する ②一人ひとりのコミュニケーションニーズについて理解し、利用者に対する態度や対話のあり方について自己覚知し指導を受ける ③実習記録の記入方法や内容について指導・助言を受ける 					
<p>[準備学習]</p> <p>実習の手引きの実習課題のページを熟読しておくこと。</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献]</p> <p>介護実習の手引き 「介護実習指導」</p>			<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 記録等の提出物：40% 2. 実習態度：30% 3. 介護技術：30% 		

授業のタイトル (科目名) 介護実習Ⅱ		授業の種類 (講義・演習・<u>実習</u>)		授業担当者 福島猛行・加藤英池子・平澤泰子・ 嶋田美津江・山本みよ子・高木剛・ 岡田圭祐・鹿野しづか・井内由美子			
授業の回数 集中		時間数 (単位数) 180時間・4単位		配当年次・時期 2年次・前期		必修・選択 必修	
<p>[授業の目標・ねらい]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・受け持ち利用者の生活リズムや個性を理解し、課題を明確にして介護過程を展開する。 ・個別性に基づく生活支援技術を習得する。 <p>[授業全体の内容の概要]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・受け持ち利用者の介護過程を展開する。 ・コミュニケーションの技法と心身の活性化の知識と技術を学ぶ。 ・個別性に基づく生活支援技術を学び実践する。 <p>[授業修了時の達成課題 (到達目標)]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・受け持ち利用者のアセスメント・介護計画作成と実施後の評価ができる。 ・利用者の自立に向けた心身の活性化の技術を学び、福祉用具の利用方法や工夫ができる。 ・個別性に基づく生活支援技術が習得できる。 							
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> ニーズの把握と生活課題の明確化 <ol style="list-style-type: none"> ①利用者とのコミュニケーションを通して受け持ち利用者を決定する ②生活障害に応じた個別のニーズを学ぶ ③介護計画の仕組みを実践場面から理解する コミュニケーション技法 <ol style="list-style-type: none"> ①利用者とコミュニケーションの時間と機会をつくる ②実習生同士、難しかったこと、楽しかった場面について話し合い記録をしておく ③認知症高齢者のケアにおいて、以下の項目について整理し、介護の実践を学ぶ <ul style="list-style-type: none"> ・利用者自身が困っていること望んでいること ・介護従事者が困難に感じていること ・周囲の人が困っていること ④介護場面における声かけ、コミュニケーションの技法、心身の活性化について学ぶ 生活の場におけるリハビリテーション <ol style="list-style-type: none"> ①介護計画において残存機能の活用や自立に向けた利用者の状態説明を受け、実践に参加して体得する ②福祉機器や用具の活用方法を学び、その使用方法や工夫を学ぶ ③脳血管障害、慢性関節リュウマチ、脊髄損傷、内部疾患、パーキンソン病などの疾患について説明を受け、実践の場面からその介護の特性を学ぶ 介護技術の習得 <ol style="list-style-type: none"> ①実習指導者の評価にもとづいて助言を受け、不十分な技術を補っていく ②食事の自立、排泄の自立など、個別ケアに対するアプローチの技術を学ぶ 介護計画の作成 <ol style="list-style-type: none"> ①施設の介護計画を読み、実際例を学ぶ ②受け持ち利用者の介護計画を作成する過程において実習指導者のスーパービジョンを受ける ③介護計画に沿って実践し、その妥当性を検証する ④介護計画の作成・実施の過程を通して、多職種との協働や関係機関との連携の重要性を学ぶ 							
<p>[準備学習]</p> <p>実習の手引きの実習課題のページを熟読しておくこと。</p>							
<p>[使用テキスト・参考文献]</p> 介護実習の手引き 「介護実習指導」				<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 記録等の提出物：40% 2. 実習態度：30% 3. 介護技術：30% 			

介護福祉科目
(介護)

授業のタイトル (科目名) 介護実習Ⅲ		授業の種類 (講義・演習・(実習))		授業担当者 福島猛行・加藤英池子・平澤泰子・ 嶋田美津江・山本みよ子・高木剛・ 岡田圭祐・井内由美子	
授業の回数 集中	時間数 (単位数) 45時間・1単位	配当年次・時期 2年次・前期	必修・選択 必修		
【授業の目標・ねらい】 利用者の心身状態や様々な生活の場における介護のあり方を見学・体験し、利用者の生活や介護方法を理解する。 ・家庭を訪問し訪問介護や訪問入浴介護について理解する。 ・認知症高齢者のグループホームを理解する。 ・利用者の心身の障害に応じた施設介護・通所介護・訪問介護について理解する。					
【授業全体の内容の概要】 ・訪問介護員に同行して家庭を訪問し、訪問介護や訪問入浴介護を体験する。 ・認知症高齢者グループホームの生活を体験する。 ・心身の障害に応じた施設介護・通所介護・訪問介護を体験する。					
【授業修了時の達成課題 (到達目標)】 ・家庭を訪問して利用者の状態やニーズに応じた訪問介護や訪問入浴介護が理解できる。 ・認知症高齢者グループホームの生活リズムや自立に向けた個別のケアが理解できる。 ・障害に応じた利用者の個性を理解し、多職種協働のチームケアの一員としての介護福祉士の役割が理解できる。					
【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数 1. 訪問介護・訪問入浴介護の体験実習 ①利用者の生活状況を把握し、生活課題に応じたサービス内容を理解する ②利用者の心身状態に応じた介護方法や工夫・留意点を学ぶ ③地域での生活を継続するために利用している他のサービスを確認し、多職種との連携を学ぶ ④利用者や家族との信頼関係の重要性を学ぶ 2. 認知症高齢者のグループホームの体験実習 ①利用者の心身状態を把握し、グループホームの生活特性や地域との繋がりを学ぶ ②利用者とのコミュニケーションや趣味活動などの関わりを通して生活の楽しみを理解する。 ③利用者や家族との信頼関係の重要性を学ぶ ④安全・安楽な生活継続のための生活や環境整備の工夫を学ぶ 3. 障害別の施設介護・通所介護・訪問介護の体験実習 ①利用者の心身状態を理解し、障害に応じたコミュニケーション技術や介護方法を学ぶ ②心身の障害に応じた利用者の生活障害の実際を学ぶ ③利用者や家族との信頼関係の重要性を学ぶ					
【準備学習】 実習の手引きの実習課題のページを熟読しておくこと。					
【使用テキスト・参考文献】 介護実習の手引き 「介護実習指導」			【単位認定の方法及び基準】 1. 記録等の提出物：40% 2. 実習態度：30% 3. 介護技術：30%		

授業のタイトル (科目名) 介護実習Ⅳ		授業の種類 (講義・演習・(実習))		授業担当者 福島猛行・加藤英池子・平澤泰子・ 嶋田美津江・山本みよ子・高木剛・ 岡田圭祐・鹿野しづか・井内由美子	
授業の回数 集中	時間数 (単位数) 135時間・3単位	配当年次・時期 2年次・前期	必修・選択 必修		
<p>[授業の目標・ねらい]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・利用者の生活の質の向上について、価値・知識・技法の視点から体系的に学ぶ。 ・利用者の尊厳を守り、自立に向けた生活支援技術を習得する。 ・他の科目で学習した知識や技術を総合して、具体的な介護サービス提供の基本となる実践力を習得する。 <p>[授業全体の内容の概要]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・受け持ち利用者の介護計画の作成、実施後の評価、計画の修正の介護過程を展開する。 ・夜間介護など介護従事者の多様な業務形態を体験する。 ・グループ活動を企画し実践する。 ・多職種との協働や地域社会・ボランティアとの連携を学ぶ。 <p>[授業修了時の達成課題 (到達目標)]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・受け持ち利用者の介護計画の作成・実施後の評価・計画修正の介護過程を展開して実践できる。 ・自立に向けた生活支援技術が習熟できる。 ・夜間介護などを通して介護の連続性や多職種との連携を学び、チームの一員としての介護福祉士の役割が理解できる。 ・施設と在宅の関係を通して地域における施設ケアの役割が理解できる。 					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <p>1. 介護過程の展開</p> <p>①介護実習Ⅱで作成・実施・評価した介護計画の反省点をふまえながら作成する</p> <p>②介護過程の展開において実習指導者のスーパービジョンを受け、介護計画を作成する技術や能力を高める</p> <p>2. ケアカンファレンス</p> <p>ケアカンファレンスに参加してその実際を体験し、医療・保健分野や利用者・家族との連携の重要性を認識する</p> <p>3. 夜間介護・交代勤務</p> <p>①介護従事者の交代勤務、夜間の業務について説明を受け実際に体験する</p> <p>②夜間介護時、排泄や睡眠などについて配慮している介護方法やコミュニケーション技術について学ぶ</p> <p>③各交代勤務の業務内容の特性や連携を学ぶ</p> <p>4. グループ活動・行事</p> <p>①日々のグループ活動や行事に参加することで、施設職員間の計画的連携の過程や配慮すべき事柄について学ぶ</p> <p>②利用者のグループ活動や行事への参加が、生活の楽しみ、残存機能の維持や QOL (生活の質) の向上につながることを学ぶ</p>					
<p>[準備学習]</p> <p>実習の手引きの実習課題のページを熟読しておくこと。</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献]</p> <p>介護実習の手引き 「介護実習指導」</p>			<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <p>1. 記録等の提出物：40%</p> <p>2. 実習態度：30%</p> <p>3. 介護技術：30%</p>		

介護福祉科目

(こころとからだのしくみ)

授業のタイトル (科目名) からだのしくみ		授業の種類 (講義)・演習・実習		授業担当者 戸村 成男	
授業の回数 15回	時間数 (単位数) 30時間・2単位	配当年次・時期 1年次・前期		必修・選択 必修	
<p>[授業の目的・ねらい] 人間理解や介護技術の根拠となる「からだのしくみとはたらき」を理解する。</p> <p>[授業全体の内容の概要] 「からだのしくみとはたらき」について、系統的に学習し、生体の構造・機能と生命の終焉について理解を深める。</p> <p>[授業修了時の達成課題 (到達目標)] 介護職であっても保健・医療に関する基本的な知識が重要であることを体得するために、「からだのしくみとはたらき」を理解し、他職種との連携がはかれる人材となることを目指す。</p>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 人体の構造と機能の基礎知識 2. 人体の構造と機能 ①循環器系(1) 3. 人体の構造と機能 ②循環器系(2) 4. 人体の構造と機能 ③呼吸器系 5. 人体の構造と機能 ④消化器系 6. 人体の構造と機能 ⑤脳と神経系 7. 人体の構造と機能 ⑥骨格系と筋系 8. 人体の構造と機能 ⑦腎と尿路系 9. 人体の構造と機能 ⑧内分泌系 10. 人体の構造と機能 ⑨生殖器系 11. 人体の構造と機能 ⑩血液とそのはたらき 12. 人体の構造と機能 ⑪免疫系 13. 人体の構造と機能 ⑫感覚器系 14. 感染症とその対策 15. 人生の終焉の支援 <p>授業到達目標達成度の判定</p>					
<p>[準備学習] 毎回、授業の前に資料のプリントを配り、それを使用して授業をすすめる。参考文献を学習の際に使用するとさらに理解が深まる。</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献] 田沼久美子・益田律子・三枝英人／からだの事典／成美堂出版 人体の構造と機能 (解剖生理学)／メディカ出版 養老孟司 (監訳)／生きている人体／時空出版</p>			<p>[単位認定の方法及び基準] 評価基準 (出席および筆記試験による総合評価) 出席：40% 期末試験：60%</p>		

授業のタイトル (科目名) こころのしくみ		授業の種類 (講義)・演習・実習		授業担当者 小林 恵	
授業の回数 15回		時間数 (単位数) 30時間・2単位		配当年次・時期 1年次・前期	
				必修・選択 必修	
<p>【授業の目的・ねらい】 介護サービスを実際に提供する際の根拠となる、人間の「こころのしくみ」について学ぶことを目的としている。本講義を通して、実際の介護現場で利用者の立場に立った（こころに沿った）援助ができるよう、人間のこころのはたらきやしきみについての基礎的知識を身に付ける。さらには、現代の介護ニーズの多様化に答えられるよう、ライフスパンの視点を取り入れて、こころのしくみの発達の变化についても学習する。</p> <p>【授業全体の内容の概要】 本講義では、人間の「こころのしくみ」を理解するために、主に次の3点について学ぶ。 ①脳のとくりと働きの理解 ②こころと脳をつながり ③こころのしくみに関する基礎的な諸理論</p> <p>【授業修了時の達成課題 (到達目標)】 「こころのしくみ」に関する知識を身につけることで、人間をより深く理解することができるようになる。加えて、利用者の「こころ」や安全・安心を重視した介護サービスを行う姿勢が養われる。</p>					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション：「こころのしくみ」を理解する必要性と意義 2. 脳のとくりと働きの理解 3. こころと脳をつながり 1：こころの理解・こころを作り出す脳 4. こころと脳をつながり 2：感覚・知覚・認知のしくみ① 5. こころと脳をつながり 3：感覚・知覚・認知のしくみ② 6. こころのしくみの基礎 1：記憶のしくみ① 7. こころのしくみの基礎 2：記憶のしくみ② 8. こころのしくみの基礎 3：学習のしくみ 9. こころのしくみの基礎 4：欲求・動機づけのしくみ 10. こころのしくみの基礎 5：感情のしくみ 11. こころのしくみの基礎 6：自分を守るこころのしくみ① 12. こころのしくみの基礎 7：自分を守るこころのしくみ② 13. こころのしくみの基礎 8：社会性のしくみ 14. こころのしくみの基礎 9：自己のしくみ 15. こころのしくみの基礎 10：パーソナリティのしくみ <p>授業到達目標達成度判定の筆記試験</p>					
<p>【準備学習】 日頃から人間のこころの働きについて関心を持つことで、授業での内容を自分自身への問題として引き付け、より深く理解できるようになります。まずは、自分自身のこころの働きを普段から意識してみましょう。 毎時間の授業内で、次週取り上げる内容と教科書のページをお知らせします。教科書を使って予習してきてください。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】 (テキスト) 最新介護福祉全書12巻「こころとからだのしくみ」 メヂカルフレンド社</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】 授業態度・出席：40% 期末テスト：60%</p>		

授業のタイトル (科目名) こころとからだのしくみ I		授業の種類 (講義)・演習・実習		授業担当者 加藤英池子	
授業の回数 15回		時間数 (単位数) 30時間・2単位		配当年次・時期 1年次・後期	
				必修・選択 必修	
<p>【授業の目標・ねらい】 食事、排泄、移動に関連したこころとからだのしくみを理解し、機能低下による安全や心理面への配慮を習得する。</p> <p>【授業全体の内容の概要】 食事、排泄、移動の身体的、精神的、社会的意義・目的と機能低下による影響と対応を理解する。</p> <p>【授業修了時の達成課題 (到達目標)】 食事、排泄、移動に関連するこころとからだのしくみや機能低下による影響について理解し、利用者理解や介護サービスの根拠につなげることができる。</p>					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 食事に関連したこころとからだのしくみ <ol style="list-style-type: none"> ① 食事の身体的、精神的、社会的意義と目的 2. ② 食べる仕組みと食欲・美味しさを感じる仕組み 3. ③ 機能低下が及ぼす食事への影響 4. ④ 食欲不振や嚥下困難、脱水などの原因と観察・日常生活の援助のポイント <ol style="list-style-type: none"> ⑤ 経管栄養、点滴輸液についての医療的処置・管理についての基礎的知識 5. 排泄に関連したこころとからだのしくみ <ol style="list-style-type: none"> ① 排泄の身体的、精神的、社会的意義と目的 ② 排便・排尿の仕組みと自己の尊厳を貫きたい排泄習慣 6. ③ 機能低下が及ぼす排泄の影響 7. ④ 尿失禁・尿閉・下痢・便秘・腹痛などの原因と観察・日常生活の援助のポイント 8. ⑤ 尿道カテーテル装着者、人工肛門装着者についての医療的処置・管理についての基礎的知識 9. 移動に関連したこころとからだのしくみ <ol style="list-style-type: none"> ① 移動の身体的、精神的、社会的意義と目的 10. ② 機能低下が及ぼす移動への影響 11. ③ 歩行・立ち上がり・起き上がり・寝返りについての移動につながる関節と骨格筋の機能 12. ③ 歩行・立ち上がり・起き上がり・寝返りについての移動につながる関節と骨格筋の機能 13. ④ 移動からみた食事・排泄・入浴の介助 14. ④ 移動からみた食事・排泄・入浴の介助 15. ⑤ 転倒・転落などの原因と観察・対応のポイント <ol style="list-style-type: none"> ⑥ 介護予防に役立つ体操とその知識 <p>まとめと評価</p>					
<p>【準備学習】 既習科目「こころのしくみ」、「からだのしくみ」の振り返りをする。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】 「こころとからだのしくみ」メヂカルフレンド社</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】 試験及び出席状況により総合的に評価する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 期末テスト：50% 2. 提出物：30% 3. 授業態度：20% 		

授業のタイトル（科目名） こころとからだのしくみⅡ		授業の種類 （講義・演習・実習）		授業担当者 城 正子	
授業の回数 15回		時間数（単位数） 30時間・2単位		配当年次・時期 2年次・前期	
				必修・選択 必修	
<p>【授業の目標・ねらい】 入浴・清潔、身じたく、睡眠と休息に関連したこころとからだのしくみと機能低下による影響ならびに死にゆく人のこころとからだの変化を理解し、安全や心理面への配慮を習得する。</p> <p>【授業全体の内容の概要】 入浴・清潔、身じたく、睡眠と休息の身体的、精神的、社会的意義・目的と機能低下による影響と対応を理解し、ならびに死にゆく人のこころとからだの変化を理解し、安全や心理面への配慮を習得する。</p> <p>【授業修了時の達成課題（到達目標）】 入浴・清潔、身じたく、睡眠と休息に関連するこころとからだのしくみや機能低下による影響ならびに死にゆく人のこころとからだの変化を理解し、利用者理解や介護サービスの根拠につなげることができる。</p>					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 身じたくに関連したこころとからだのしくみ <ol style="list-style-type: none"> ①身支度の身体的、精神的、社会的意義と目的 2. ②機能低下が及ぼす身支度への影響 3. ③機能低下に応じた口腔ケアと口腔機能向上のトレーニングの仕方 4. 睡眠・休息に関連するこころとからだのしくみ <ol style="list-style-type: none"> ①睡眠・休息の身体的、精神的、社会的意義と目的 5. ②不眠についてのタイプ、原因、心身機能への影響 6. ③睡眠・休息の方法と眠剤使用時の留意点 7. 入浴、清潔保持に関連したこころとからだのしくみ <ol style="list-style-type: none"> ①入浴、清潔保持の身体的、精神的、社会的意義と目的 8. ②機能低下が及ぼす入浴、清潔への影響 9. ③入浴、清潔保持での観察と変化の気づきと対応ならびに医療との連携 10. 死にゆく人のこころとからだのしくみ <ol style="list-style-type: none"> ①生と死の意味と生活支援の実践価値 11. ②終末期の定義、判断と利用者・家族の意向に添ったターミナルケア 12. ③終末期の身体的、精神的、社会的、実存的苦痛 13. ④終末期の生命徴候と観察のポイント 14. ⑤ターミナルケアにおける介護福祉士の役割 15. ⑥夜間における高齢者の急変予測される基礎疾患と症状ならびにその観察と急変への対応まとめと評価 					
<p>【準備学習】 既習科目「こころのしくみ」、「からだのしくみ」を振り返ること。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】 「こころとからだのしくみ」メヂカルフレンド社</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】 試験および出席状況により総合的に評価する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 期末テスト：50% 2. 提出物：30% 3. 授業態度：20% 		

授業のタイトル (科目名) 発達と老化の理解 I		授業の種類 (講義)・演習・実習)		授業担当者 師井 和子	
授業の回数 15回	時間数 (単位数) 30時間・2単位	配当年次・時期 1年次・前期		必修・選択 必修	
<p>【授業の目標・ねらい】 本講義では、生涯発達の観点から加齢(老化)について理解することを目的とする。また、加齢(老化)に伴うところとからだの変化に関する基礎的知識を習得し、高齢者の心理について理解を深めることも目的とする。</p> <p>【授業全体の内容の概要】 本講義では、人間の発達と加齢(老化)を理解するために、主に次の4点について学ぶ。 ①人間の成長と発達を理解するために、生涯発達心理学の基礎的知識(発達段階や発達課題など)について学ぶ。 ②老年期の発達と成熟について、老年期の定義や発達課題を中心に学ぶ。 ③加齢(老化)に伴う心身の機能の変化や、それらが及ぼす日常生活への影響について学ぶ。 ④高齢者の心理について、事例を交えながら学ぶ。</p> <p>【授業終了時の達成課題(到達目標)】 人間の発達と加齢(老化)を理解することで、高齢者の気持ちを踏まえた介護福祉が実践できるようになる。</p>					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション：人間の「発達と老化」を理解する必要性と意義 2. 人間の成長と発達の基礎的理解：発達の定義、発達の段階、発達課題 3. 老年期の発達と成熟1：老年期の定義、超高齢期の心理と個人差 4. 老年期の発達と成熟2：老年期的人格と尊厳の理解 5. 老年期の発達と成熟3：老いの価値観、喪失体験 6. 老化に伴うところと体の変化の特徴1：心身の老化による変化の理解 7. 老化に伴うところと体の変化の特徴2：心身の老化の回復力・適応力の変化 8. 老化に伴うところと体の変化と日常生活1：身体的機能の変化と日常生活への影響 9. 老化に伴うところと体の変化と日常生活2：知的、認知機能の変化と日常生活への影響 10. 老化に伴うところと体の変化と日常生活3：精神的機能の変化と日常生活への影響 11. 高齢者の心理1：要介護による高齢者の心理 12. 高齢者の心理2：マズローの欲求段階説の理解と自己実現 13. 高齢者の心理3：不適応状態を緩和する心理の理解 14. 高齢者の心理4：環境の変化による心理的变化の理解 15. 高齢者の心理5：事例に基づいた高齢者の心理の理解 <p>試験</p>					
<p>【準備学習】 3人以上の高齢者と会話し、簡単な会話内容とその時の自分の感想を記録する。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】 (使用テキスト) 新・介護福祉士養成講座11巻『発達と老化の理解』 中央法規出版 (参考文献) 師井和子著『ここをつなぐ音楽回想法』 ドレミ楽譜出版</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】 期末テスト：50% ミニテスト：10% 出席および授業態度：40%</p>		

授業のタイトル (科目名) 発達と老化の理解Ⅱ		授業の種類 (講義)・演習・実習)		授業担当者 戸村 成男	
授業の回数 15回	時間数 (単位数) 30時間・2単位	配当年次・時期 1年次・後期		必修・選択 必修	
<p>【授業の目的・ねらい】 介護実践に必要な知識という観点から、老化に伴う身体機能の変化や疾病の特徴および介護のポイントを学ぶ。</p> <p>【授業全体の内容の概要】 老化に伴う高齢者の生活障害や高齢者の疾病の特徴を系統的に学び、高齢者の観察の仕方と介護のポイントを的確に身に付けさせる。</p> <p>【授業修了時の達成課題 (到達目標)】 介護職であっても保健・医療に関する基本的な知識が重要であることを体得するために、高齢者の生活障害や高齢者の疾病の特徴を系統的に学び、高齢者の観察の仕方と介護のポイントを的確に身に付けさせることを目指す。</p>					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数</p> <p>1. 老化に伴う心身の変化の基礎知識</p> <p>2. 高齢者の病気と症状および介護のポイント ①高血圧症</p> <p>3. 高齢者の病気と症状および介護のポイント ②肺炎</p> <p>4. 高齢者の病気と症状および介護のポイント ③メタボリックシンドロームと痛風</p> <p>5. 高齢者の病気と症状および介護のポイント ④脂質異常症 (高脂血症)</p> <p>6. 高齢者の病気と症状および介護のポイント ⑤糖尿病</p> <p>7. 高齢者の病気と症状および介護のポイント ⑥動脈硬化症</p> <p>8. 高齢者の病気と症状および介護のポイント ⑦脳血管障害 (脳卒中)</p> <p>9. 高齢者の病気と症状および介護のポイント ⑧虚血性心疾患</p> <p>10. 高齢者の病気と症状および介護のポイント ⑨慢性腎臓病 (CKD)</p> <p>11. 高齢者の病気と症状および介護のポイント ⑩尿路感染症・前立腺疾患</p> <p>12. 高齢者の病気と症状および介護のポイント ⑪神経難病 (パーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症など)</p> <p>13. 高齢者の病気と症状および介護のポイント ⑫感染症の基礎知識</p> <p>14. 高齢者の病気と症状および介護のポイント ⑬感染症の対策</p> <p>15. 高齢者の病気と症状および介護のポイント ⑭高齢者の転倒予防</p> <p>授業到達目標達成度の判定</p>					
<p>【準備学習】 毎回、授業の前に資料のプリントを配り、それを使用して授業をすすめる。参考文献を学習の際に使用するとさらに理解が深まる。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】 田沼久美子・益田律子・三枝英人／からだの事典／成美堂出版 病気がみえる／メディックメディア社</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】 評価基準 (出席および筆記試験による総合評価) 出席：40% 期末試験：60%</p>		

授業のタイトル (科目名) 認知症の理解 I		授業の種類 (講義)・演習・実習		授業担当者 小林 恵	
授業の回数 15回		時間数 (単位数) 30時間・2単位		配当年次・時期 1年次・後期	
				必修・選択 必修	
[授業の目的・ねらい] 認知症に関する心理的、社会的、および医学的な基礎的知識を習得することを目的とする。					
[授業全体の内容の概要] 本講義では、認知症を正しく理解するために、主に次の3点について学ぶ。 ①認知症を取り巻く状況 ②医学的側面から見た認知症の基礎 ③認知症に伴うこころとからだの変化と、それらの変化が及ぼす日常生活への影響					
[授業修了時の達成課題 (到達目標)] 認知症を取り巻く状況や、認知症の人の心理・行動的特徴を正しく理解することで、適切かつ効果的な介護を実践するための素地が養われる。					
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 1. オリエンテーション：認知症を理解する必要性と意義 2. 認知症を取り巻く状況1：本人本位の視点 3. 認知症を取り巻く状況2：認知症ケアの歴史と理念 4. 医学的側面から見た認知症の基礎1：脳の機能と老化 5. 医学的側面から見た認知症の基礎2：認知症に類似した状態①（軽度認知障害） 6. 医学的側面から見た認知症の基礎3：認知症に類似した状態②（せん妄・うつ病） 7. 医学的側面から見た認知症の基礎4：認知症の診断① 8. 医学的側面から見た認知症の基礎5：認知症の診断② 9. 医学的側面から見た認知症の基礎6：認知症の診断③ 10. 医学的側面から見た認知症の基礎7：認知症の原因疾患① 11. 医学的側面から見た認知症の基礎8：認知症の原因疾患② 12. 医学的側面から見た認知症の基礎9：認知症の原因疾患③ 13. 医学的側面から見た認知症の基礎10：認知症の予防 14. 認知症の人の行動・心理症状1：中核症状と周辺症状 15. 認知症の人の行動・心理症状2：認知症の人の心理的理解 授業到達目標達成度判定の筆記試験					
[準備学習] 日頃から周囲の人や高齢者のこころについて関心を持つことで、授業での内容をより深く理解できるようになります。また、認知症に関して日々取り上げられる新聞やニュースなどにも、積極的に目を向けてください。 毎時間の授業内で、次週取り上げる内容と教科書のページをお知らせします。教科書を使って予習してきてください。					
[使用テキスト・参考文献] (テキスト) 新・介護福祉士養成講座12巻「認知症の理解」 中央法規出版			[単位認定の方法及び基準] 授業態度・出席：40% 期末テスト：60%		

授業のタイトル（科目名） 認知症の理解Ⅱ		授業の種類 （講義・演習・実習）		授業担当者 加藤英池子	
授業の回数 15回		時間数（単位数） 30時間・2単位		配当年次・時期 2年次・前期	
				必修・選択 必修	
<p>【授業の目標・ねらい】 認知症の知的障害、精神障害、発達障害で必要とする心理的・社会的ケアについての基礎知識を養うと共に認知症のある人の体験や意思表示が困難な特性を理解する。また、地域との連携や家族を含めた周囲の環境にも配慮した介護の現場を学ぶことを目的とする。</p> <p>【授業全体の内容の概要】 認知症高齢者の特徴的な心理、行動を理解する為に、周辺症状についても事例を交えながら、対応法を学ぶ。さらに地域との連携や家族への支援についても視野を広め、介護の現状を学ぶ。</p> <p>【授業終了時の達成課題（到達目標）】 認知症高齢者の障害を深く理解し、身体的・精神的・社会的について援助法ができるようになる。</p>					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 認知症とは 2. 認知症ケアの歴史・理念 3. 認知症を取り巻く状況 4. 医学的側面から見た認知症の基礎1 5. 医学的側面から見た認知症の基礎2 6. 認知症の人のこころの理解・行動障害の理解 7. 認知症に伴うこころと身体の変化と日常生活1 8. 認知症に伴うこころと身体の変化と日常生活2 9. 認知症に伴うこころと身体の変化と日常生活3 10. 認知症の人の生活の場と介護 11. 認知症の人の生活支援の事例1 12. 認知症の人の生活支援の事例2 13. 地域との連携・社会資源の活用 14. 家族への支援・チームアプローチ 15. 認知症に関する制度 <p>※授業到達目標度判定筆記試験</p>					
<p>【準備学習】 既習科目「認知症の理解Ⅰ」の振り返りをする。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】 新 介護福祉士養成講座 認知症の理解 中央法規 （参考資料） 授業に合わせて資料を配布する。</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】 （試験やレポートの評価基準など）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 期末試験：50% 2. 授業態度：20% 3. 提出物・ミニテスト：30% 		

授業のタイトル (科目名) 障害の理解 I		授業の種類 (講義)・演習・実習)		授業担当者 岡田 圭祐	
授業の回数 15回	時間数 (単位数) 30時間・2単位	配当年次・時期 1年次・後期		必修・選択 必修	
<p>【授業の目的・ねらい】 ICF やノーマライゼーションなど、障害児・者の福祉に関して基礎となる概念を習得する。身体障害、難病のある人の心理や身体機能に関する医学的知識を習得する。身体障害、難病のある人の体験を理解し、本人を含めた家族支援、チームアプローチの実際について学び、生活実態に根ざした介護の視点を育む。</p> <p>【授業全体の内容の概要】 ・障害の概念、障害者福祉の基礎理念を学び、障害について基礎的理解を深めるように支援する。 ・身体障害について、医学的側面の知識、心理、機能変化に伴う日常生活への影響を学び、家族への支援、地域における連携と協働の実際を習得できるようにする。 ・難病について、医学的側面の知識、心理、機能変化に伴う日常生活への影響を学を学び、家族への支援、地域における連携と協働の実際を習得できるようにする。</p> <p>【授業修了時の達成課題 (到達目標)】 ・障害の概念、障害者福祉の基礎的理念と発生の背景を理解できる。 ・身体障害について、医学的側面の知識をもち、心理、機能変化に伴う日常生活への影響を理解できる。 ・難病について、医学的側面の知識をもち、心理、機能変化に伴う日常生活への影響を理解できる。 ・身体障害、難病について、地域における連携、家族支援の実際を理解できる。</p>					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】 コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 障害の基礎的理解① 障害の概念とは 2. 障害の基礎的理解② 障害者福祉の基本理念 〈身体障害の理解と支援〉 3. 身体障害の医学的側面の基礎的知識 視覚障害 4. 身体障害者の医学的側面の基本的知識 聴覚障害・言語機能の障害 5. 身体障害の医学的側面の基礎的理解 肢体不自由 6. 身体障害の医学的側面の基礎的理解 内部障害 7. 身体障害のある人の心理 8. 身体障害に伴う機能の変化と日常生活への影響 9. 地域における連携と協働 10. 家族への支援 〈難病の理解と支援〉 11. 難病の種類と特性 12. 難病のある人の心理 13. 難病に伴う機能の変化と日常生活への影響 14. 地域における連携と協働 15. 家族への支援 <p>まとめ・評価</p>					
<p>【準備学習】 学生諸君が予習してくる事を前提に授業を行うので、予習は必須である。また授業で学習したことを、自ら繰り返し練習することが望ましい。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】 「障害の理解」中央法規</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】 (試験やレポートの評価基準など) 出席状況、レポート、学期末テストを総合的に判断する。 1. 期末テスト：50% 2. 提出物・小テスト：30% 3. 授業態度 (出席含む)：20%</p>		

授業のタイトル（科目名） 障害の理解Ⅱ		授業の種類 （講義・演習・実習）		授業担当者 岡田 圭祐	
授業の回数 15回		時間数（単位数） 30時間・2単位		配当年次・時期 2年次・後期	
必修・選択 必修					
<p>【授業の目的・ねらい】 障害のある人の心理や身体機能に関する基礎的知識を習得するとともに、障害のある人の体験を理解し、本人のみならず、家族を含めた周囲の環境にも配慮した介護の視点を習得する。</p> <p>【授業全体の内容の概要】 精神障害、知的障害、発達障害について、医学的側面からの基礎的な知識を養うとともに、障害のある人の心理、周囲の環境にも配慮した介護について理解を深める。</p> <p>【授業修了時の達成課題（到達目標）】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 精神障害、知的障害、発達障害について理解する。 2 障害のある人の心理を理解する。 					
<p>【授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法】</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス <p>[精神障害]</p> <ol style="list-style-type: none"> 2. 障害の医学的側面の基礎的知識(1) 精神障害の種類と原因と特性 3. 障害の医学的側面の基礎的知識(2) 障害に伴う機能の変化と日常生活への影響 4. 連携と協力 5. 家族への支援 <p>[知的障害]</p> <ol style="list-style-type: none"> 6. 障害の医学的側面の基礎的知識(3) 知的障害の種類と原因と特性 7. 障害の医学的側面の基礎的知識(4) 障害に伴う機能の変化と日常生活への影響 8. 連携と協力 9. 家族への支援 <p>[発達障害]</p> <ol style="list-style-type: none"> 10. 障害の医学的側面の基礎的知識(5) 知的障害の種類と原因と特性 11. 障害の医学的側面の基礎的知識(6) 障害に伴う機能の変化と日常生活への影響 12. 連携と協力 13. 家族への支援 14. 障害の医学的側面の基礎的知識(7) 障害のある人の心理（心理的影響、受容） 15. 障害の医学的側面の基礎的知識(8) 障害のある人の心理（適応と適応規制） <p>まとめと評価</p>					
<p>【準備学習】 学生諸君が予習してくる事を前提に授業を行うので、予習は必須である。また授業で学習したことを、自ら繰り返し練習することが望ましい。</p>					
<p>【使用テキスト・参考文献】 「障害の理解」中央法規出版</p>			<p>【単位認定の方法及び基準】 （試験やレポートの評価基準など） 出席状況、レポート、学期末テストを総合的に判断する。 1. 期末テスト：50% 2. 提出物・小テスト：30% 3. 授業態度（出席含む）：20%</p>		

索 引

[う]	ウェブデザイン論……………17	[し]	社会学……………36	
[え]	英語文化論……………9	社会の理解Ⅰ……………29	社会の理解Ⅱ……………30	
エッセンシャルスタディⅠ……………20	障害の理解Ⅰ……………71	エッセンシャルスタディⅡ……………21	障害の理解Ⅱ……………72	
[お]	音楽療法……………6	[す]	スポーツ実技……………10	
[か]	介護過程Ⅰ（意義と展開）……………51	スポーツ・レクリエーション論……………11	[せ]	生活環境学……………33
介護過程Ⅱ（実践的展開）……………52	介護過程Ⅲ（居宅）……………53	生活支援技術Ⅰ……………45	生活支援技術Ⅱ……………46	
介護過程Ⅳ（施設）……………54	介護実習Ⅰ……………57	生活支援技術Ⅲ……………47	生活支援技術Ⅳ……………48	
介護実習Ⅱ……………58	介護実習Ⅲ……………59	生活支援技術Ⅴ……………49	生活支援技術Ⅵ……………50	
介護実習Ⅳ……………60	介護総合演習Ⅰ……………55	生活支援技術Ⅶ……………50	生物学……………32	
介護総合演習Ⅱ……………56	介護の基本Ⅰ……………41	[に]	人間関係とコミュニケーション……………28	
介護の基本Ⅱ……………42	介護の基本Ⅲ……………43	人間の尊厳と自立……………27	認知症の理解Ⅰ……………69	
からだのしくみ……………63	からだのしくみ……………63	認知症の理解Ⅱ……………70	[は]	発達と老化の理解Ⅰ……………67
カレッジ・イングリッシュⅠ……………7	カレッジ・イングリッシュⅡ……………8	発達と老化の理解Ⅱ……………68	[ま]	マルチメディア演習応用A……………18
[き]	キャリアデザインⅠ……………22	マルチメディア演習応用B……………19	マルチメディア演習基礎Ⅱ……………16	
キャリアデザインⅡ……………23	[け]	マルチメディア論Ⅰ……………14	マルチメディア論Ⅱ……………15	
経営管理論……………31	経済学……………35	[り]	倫理学……………5	
現代居住環境論……………34	憲法……………37	[れ]	レクリエーション活動援助法……………12	
[こ]	こころとからだのしくみⅠ……………65	レクリエーション実技……………13		
こころとからだのしくみⅡ……………66	こころのしくみ……………64			
コミュニケーション技術……………44				